

お隣さんと始める節約生活。
電気代のために一緒に部屋で過ごしませんか？

くろい



ファンタジア文庫

2907



登場人物

間宮哲郎
まみや てつろう

(間宮君)

一人暮らしをする高校1年生。
隣に住む山野さんと一緒に
節約生活が始める。

山野さん
やまの

一人暮らしをする高校2年生。
間宮君のお隣さん。
間宮君と一緒に節約生活が始める。

筑波恵美
つくば えみ

(みっちゃん)

同じ学校に通う高校1年生で、
ウザ絡みが得意なクラスメイト。
間宮君とはなにか因縁があるらしい？

筑波恵子
つくば えいこ

(けい先輩)

高校3年生。
間宮君と山野さんの生活を
優しく見守っている。
みっちゃんとは姉妹。

間宮寧々
まみや ねね

間宮君の姉で社会人の女性。
口調は厳しいが、
実際には間宮君に甘いお姉さん。

I BEGIN SAVING LIFE
WITH NEIGHBOR.



高校生になり一人暮らしをすることになった。

家はそこそこの田舎、通える高校はあったが……残念な所ばかりなのが理由である。

そんな俺は不動産屋の人とアパートの内見に来ていた。

通う予定の高校はすぐそば。近くにはコンビニ。駅までは歩いて15分。スーパーへは20

分。何とも言えない微妙感が漂う立地。

そのせいか、家賃は良い具合である。

部屋を見せて貰う間際、不動産屋の人が電話で少し席を外す。

これから見させて貰う予定の部屋の前で待ちぼうけしているとお隣の玄関が開いた。

出てきたのは大学生？ くらいの女性。そんな彼女は俺の存在に気が付き声を掛ける。

「もしかして、お隣に住む人？ もしそうだったら、よろしくね」

「え、あ、はい」

まだ決まっていらないがつい生返事をしてしまう。

「そっか。じゃあ、私はこれで」

と言って去って行くお隣さんになるかもしれない人。

そんな彼女だが、去ったと思いきやすぐに戻って来た。

「カギ閉め忘れちゃった」

聞いてもいないが、未だ玄関で待機している俺に無言を貫くのが辛かったのだろう。

恥ずかしそうに言いながら、鍵を閉めて再び去って行く。

少しおっちょこちよいな所があるお隣さん。

そんな彼女と俺が互いの生活に踏み込むくらい仲良くなるのを、この時の俺は知らない。

1章

俺は一人暮らしをしている。そんな俺はある悩みを抱えていた。

「もつと遊びたい。けどお金はない」

物足りないのだ。

貧乏では無いのだが、遊ぶ金がちゃんとあると言えるかと言えば、あるけれども、少ないとしか言いようがない。

そこで遊ぶためのお金をどのように工面しようかと考える。

収入を増やすか節約をするかの選択肢があるのだが、収入を増やすのは出来そうにない。通う高校ではアルバイトは禁止。校則には割と厳しくバイトをしているのがバレてしまえば停学を容赦なく突きつけられる。

アルバイトの許可が出るのは月の収支が赤字で、生活が困難になっている場合のみだ。

俺は遊ぶ金がないだけで赤字ではない。ゆえに、アルバイトの許可は貰えないだろう。要するに遊ぶ金を作るためには支出を減らすしか無いのだ。

とは言え、節約で日々の豊かさを失いたくはない。

例えば、そろそろ冷房が必要になる季節。いくら節約のためでも、冷房代をケチって暑い部屋で暮らしたいかと言われれば嫌だししか言えない。豊かさを保ちながらも節約したい。遊ぶ金も欲しいが、そのために冷房をケチるかと言われれば答えはNOなのだ。

実に贅沢な悩みである。

「どうすれば良いんだろうな……」

遊んで来た帰りに郵便物がないかどうか、住んで居るアパートの間宮哲郎と書かれている郵便受けを開けながら愚痴をこぼす。

「何がどうしたの？」

俺の愚痴が聞こえたのか、俺と同様にアパートの一階に備え付けられた郵便受けを確認していた、隣に住まう山野さんが話しかけて来る。

彼女は実家が田舎なせいで一人暮らしを始めたそうだ。

彼女とはアパートの内見に来た時以来、すれ違うたびに挨拶をする仲であり、田舎から出てきたのもそんなすれ違う時にした世間話で知った。

「あ、どうも山野さん。いやー、一人暮らしが世知辛くて……別に生活には困って無いんですけど、遊ぶお金がちょっと物足りないんです」

「私もそんな感じだよ。欲しい服とかがあるのにうちの高校ってバイトは原則禁止、収支

がマイナスじゃないと許可できませんとかほんとふざけんなって感じだよ」

長々と話したことが無かったので知らなかったが、お隣さんは俺と同じく高校生らしい。部屋を決める際の内見の時に会って以来、格好が大人びているから大学生くらいかと思っただけが外れだったようだ。

「ですよー。ほんと高校生の大事な時間を何だと思ってるんだって感じですよ。こっちは遊びたいっていうのに」

「うんうん、分かる。というか、間宮君って高校生だったんだ。大人っぽいから大学生かと思ってたよ」

「あ、はい。俺も山野さんの事、大学生かと思ってましたよ。と言うか、もしかしてなんですけどここから一番近いあそこですか？」

「え、そうだけ。もしかして、間宮君も？」

お隣さんである山野さんは俺と同じ高校に通っているらしい。

学校と言えど広いし、会わないのは普通の事だ。

「そうです。いやー、まさか同じ高校に通っているなんて思いもしませんでした」

「私もだよ。まさか、間宮君と一緒の高校に通っているなんて思ってたかった。学年は？」

「1年生です」

「私は2年生。間宮君って年下だったんだ。ちょっと意外かも。それにしても、最近はずかになってきたね。駅から歩いて来ただけで汗びっしょり」

着ている服をつまんでバタバタと服と肌の間に空気を送り込む山野さん。

大人びた彼女が火照った体を冷やそうとする姿は見ていて飽きない。

「ほんとですよ。でも、冷房はケチりたく無いんですよ。遊ぶ金が欲しいなら節約すべきなのに」

「分かる。私も、節約しないとーって思うのに冷房つける。暑いのが苦手だし」

価値観が似ているのだろう。

変な所で同調して、分かる分かると言いあう俺と山野さん。そんな俺と山野さんは同じ高校に通っていると知ったこともあり、今までよりもフ렌ドリーに話せ、気が付けばあつという間に距離感が近くなった気がする。

「って、暑いのお話に付き合わせちゃってすみません」

まだまだ話していたい気もしたが、アパートの郵便受けは日陰ではあるが、普通に暑い。これ以上付き合わせるのはいらないので、切り上げるべく話を終わらせる。

「ううん。私から話しかけたんだし気にしないよ。ところで間宮君。今日って、これから冷房つける？」

「あー、付けますね。節約したいのに」

「あはは、私もだよ。あ、そうだ。冷房代を節約するために遊びに行っても良いかな？」
急にお部屋に遊びに行きたいと言われたら困るだろうという顔。

要するに冗談を投げかけて来てくれたのだろう。

えーつと言いつつ淀（ち）もものなら『ごめん、ごめん。冗談』って返されるに違いない。

だが、ここは俺もふざけてみるか。

「良いですよ」

「え、良いの？ 冗談で言っただつもりなんだけど」

「やはりそうでしたか。というわけで、俺も冗談です。部屋を片付けてないんで、お邪魔（じやま）されるのは勘弁（かんぺん）してください」
冗談を冗談で返した。

すると、山野さんはちよつぱり悔（くや）しそうにこう言う。

「年上をからかうなんて、間宮君は悪い子だね」

「ええ、ちよい悪（わる）ってやつです。それじゃあ」

「それじゃあね。って、玄関までは一緒だけど」

アパートの郵便受けからそれぞれの部屋の玄関へと向かう。



そして、玄関前で再び挨拶を交わす。

「じゃあね。もしかしたら、高校で会うかも。その時はよろしくね？」

ひらひら手を軽く振って山野さんは自分の部屋に入って行くのであった。

*

次の日。

別に山野さんと仲良くなったところで何かが大きく変わるわけでもなく、いつも通りに時間は過ぎ去り普通に迎えた昼休み。

俺は購買でパンと飲み物を買う。

合計450円。仕送りがまあまあ貰えているとは言え俺にとつてそこそこ痛い出費だ。

遊ぶ金が欲しいし、本格的にお弁当とまでは行かなくともおにぎりくらい作って持つてこようかなと考えてしまう。

はあ……せめてバイトが禁止でなければと思いながら一緒にご飯を食べている友達の下へと戻るのであった。

「おいおい、哲。暗い顔してどうしたんだよ」

哲とは間宮哲郎である俺のあだ名。

あまりに暗い顔をしていたのだろう。友達である幸喜に心配されてしまったらしい。

「金欠ではないけど、もつと遊ぶ金が欲しくてさ」

「金に困ってるのか？ だったら、昨日はカラオケに誘って悪かったな」

「いいや、カラオケは楽しかったし全然オッケーだ。というか、貧乏だとかそういう切羽詰まった感じでお金に困ってはいないから安心してくれ。お金にまったく余裕がなくて遊べてないわけじゃない。でも、もうちょっと遊ぶ金が欲しいなって思ってるだけだ。どうにか遊ぶお金が増えないかと色々と考えてたせいで暗い表情を浮かべていたという訳だ。だって、購買で買ったこいつらは合計450円なんだぞ？」

「んで、哲。もつと遊ぶためのお金を手にするための方法はなんか思いついたか？」

「お昼ご飯に手作りのおにぎりを持ってこようと思う。これだけで結構なお金が増える？ 後は水筒で飲み物を持ってくれば遊ぶ金を工面できるかも知れない」

「哲。それって面倒くさくね？」

「そこが問題だ。だが手間の分、自由にできるお金が増える。そう考えれば、俺なら成し遂げられるはず……だ」

自信は無い感じだが、きつと俺なら出来る……。で、出来るよな？

「んで、いつから始めるんだ？」

「明日から」

という訳で、おにぎりを作るために必要なお米と中に詰める具が部屋には無いので、手のひらにマジックペンで書いておくことで忘れないようにした。

「つぶ。手のひらにお米と具って……なんだそりゃ。男子高校生の手に書かれていい言葉じゃねえだろ」

友達の幸喜に笑われた。

確かに普通、男子高校生の手にお米と具なんて書かれてはいるわけないもんな。

「お米と具とマジックペンで手に書かれてるとか笑えてくるな。だが、幸喜よ。俺は自由に使えるお金をもう少し増やしたい。きつと、この手に書かれた字が無ければ意志の弱い俺は成し遂げることは難しい」

「知らねえよ。そんなこと。ま、手に書いとけばよっぽどの事が無い限り忘れないだろうしな。ちゃんと頑張れよ。哲、俺はお前の事を応援してっぞ！」

*

友達の幸喜に激励を送られ、俺は節約のための一歩を踏みだすべく迎えた放課後。

早速、明日お昼ご飯として持っていくためのおにぎりを作るため、材料を買いにアパートから結構離れているスーパーへと来ていた。

自炊した経験が無い俺にとってスーパーでのお買い物は地味に気分をわくわくとさせる。そんな浮足立っつ俺の手にはお米と具の字。

早速、まずはお米を買いおうと思ったちやうどその時だった。

「あ、どうも」

「ん、間宮君じゃん。どうしたの、こんなところで」

出会うはお隣さんである山野さん。

スーパーに來ているという事は家庭的な人なのか？ と思うも、手には『今日から節約！』という字がでかどかどか書かれており家庭的な人というのを真っ向から否定してくれた。

「つて、なにその手に書かれてる字。お米。そして、具つて。男子高校生の手にそんなことが書かれてるなんて、ぶっ……。ごめん、結構笑える」

俺が山野さんの手を見ていたのと同じく、俺の手も見られていたようで、書かれている『お米 具』という字を見つけられ笑われてしまう。

「そう言う、山野さんの手だつて女子高校生なのに『今日から節約！』とか笑えてきます

けど?」

「やっぱり? 昨日、間宮君との話のせいか、友達の前で節約しようかなーとかつい口にしたんだよ。そしたら、あんたは意志が弱いからこのくらいしなとて、手にこれを書かれた。酷いと思わない? 女子高生の手マジックペンでデカデカと字を書くなんてさ」

「ですネ」

「分かった。生意気な後輩が酷いって言ってたと伝えとく」

「ちょ、やめてください」

「冗談だよ。冗談。そんなこと言わないから安心しといて。さてと、ここで出会ったのも何かの縁。一緒にお買い物しよつか。スーパーで一緒にお買い物だなんて言われても嬉しくないだろうけど」

同年代女子の中でもはつきりと可愛いと言える山野さんと一緒にお買い物。

それがスーパーであつたとしても、友達に言いふらせるぐらいのありがたみはある。

「じゃあ、せっかくなので一緒にさせてください」

「うん。分かった。それで、間宮君は何を買うの?」

「お米と具ですかね」

わざとらしく、真面目な顔で手に書かれた『お米 具』という字を見せつける。

「つぷ。ちょ、ほんとやめて。真面目な顔で手に書いた言葉を言うなんてする過ぎだから可愛らしく、噴き出して笑ってくれた。

ふざけてみたが滑つたらどうしようかと思っていたし何よりだ。

「ところで、山野さんは何を買うんですか?」

「私? 取り敢えず、コンビニでご飯を買う事が多いから、なんか適当にスーパーで買えば安くなる。って感じで来ただけ。何を買うかは全然決めてない。というか、なんでお米と具なの? もっと、他に何か買わないの?」

「最初から本気を出し過ぎても空回りしそうなので。出来る事から始めよう。という訳で、自炊と言ってもお昼ご飯用を持っていくおにぎりから始めようと思ひまして」

最初からやる気を出しても空回りするだけ。勝手な考えだ。

「じゃあ、私も真似しても良いかな?」

「もちろん良いですよ。とは言っても、お米と具、以外でも良さげで節約につながりそうな食材があれば買うつもりですけど」

「だね」

そんな感じで、スーパーの店内をうろつく俺と山野さん。

野菜売り場から始まり、お魚売り場、お肉売り場、お総菜売り場、取り敢えず色々な所を歩いてみた。

その際に俺は水筒に詰めるお茶を作るための茶葉を買い物かごに入れる。計算しなくとも、ペットボトルのお茶を買って飲むよりは安いと判断しての行動だ。

店内をある程度回った後、おにぎりを作るための材料をかごに入れ始める。

おにぎり用のお米と中に詰める具。おにぎりを巻く用の海苔。おにぎりを包むためのラップ等だ。

「おにぎりはこれでよし。後は今日の夕食をどうするかだ」

気合いを入れ過ぎてすぐにへたるよか、ゆっくりと着実にステップアップした方が長続きするだろう。

ゆえに夕食は普通に出来合いの物で済ませてしまおう。

おにぎりの材料をかごに入れ終えた後、お総菜売り場に向かう。

どれを夕食にするか出来合いの総菜たちを眺める。

眺めていると嬉しい事に、このスーパーでは割と値引きされるのが早いようで、すでに4割引きのシールが貼られていた。

「凄^{まじ}いね。コンビニのお弁当より量が多くて安い。コンビニじゃなくて、毎日スーパーで

買い物すればだいぶ節約になるかもね？」

一緒に歩いていった山野さんがお弁当の値段と量に領^{うけ}きながら問いかけて来た。

「でも、コンビニと違ってちよつと遠いのが辛いと思いませんか？」

「分かる。コンビニは5分。でも、ここに来るには20分以上歩くとなるとね」

「でも、絶対に節約になるので頑張ります」

スーパーで買い物すれば節約につながるはずだ。明日から脱コンビニ生活を始めよう。

時間は少し犠^ぎ牲にするがバイトが出来ない状況の中、支出を減らす事しかできないのだから仕方がない。

「私もちよつと遠いけど、これからはスーパーで買い物することに決めた。ところで、どのお弁当にするの？」

「俺ですか？ このかつ丼にしようかなと」

「じゃあ、私はこの麻婆豆腐^{マゴチ豆腐}丼にしよう」

買い物かごにお弁当を入れる。ちよつと寂^{さび}しい食事な気もしたので袋詰^{ふく}めされたサラダとドレッシングも買った。

それなのにコンビニよりも安いとか、本当に驚^{おどろ}きである。

こうして買い物を終えた俺と山野さん。

帰る先は同じアパート。当然の様に肩を並べてゆつくりと歩き始める。

「いやー、スーパードって凄いな。コンビニより全然安くて驚いたよ」

「今までコンビニばかり使ってた過去の自分を殴ってやりたいくらいです」

「あはは……。間宮君はまだいいよ。私なんて2年生で、1年生の頃からずっとコンビニを使っただけ。もし、スーパードで毎日お買い物したら服が何着買えた事か……」

もったいない事をしたなあ……とちよつと不貞腐れている山野さん。

「でも、スーパードの方が安いのに近いコンビニを使っちゃいそうなんですよね……」

「私も。だって、スーパードまで歩くのは面倒だもん。さすがに20分も歩くのはね……」

本当に似た価値観をお持ちらしい。話していて、まるで自分と話しているかのようだ。

「と言うか、大丈夫ですか？ お米はかなり重いですよ。良ければ、持ちますけど」

俺達の手には炊かれる前のお米。

入っているキロ数が多ければ多い程、少し割安だったのが量が多いのを購入。

重いという事もあり、ここは持ってあげたほうが良いのでは？ と声を掛けてみた。

「優しいね。心配してくれるなんてさすが男の子。気持ちだけで十分。自分で持つよ」

「辛かったら言ってくださいよ？」

「うん、ありがと」

重いお米を持ちそれぞれの部屋の玄関まで帰って来た俺達が抱く感想はただ一つ。

「本当にお米が重かった」

山野さんの分も持つことになっていたらもっとヤバかったかもしれない。

持つことを断ってくれて良かったと心の底から思う。

「うん。これは明日、筋肉痛だよ」

ボヤキながら鍵をカバンから取り出す俺と山野さん。

鍵を開けて、さあ部屋へ。

そんな時だった。山野さんが俺に話しかけて来た。

「こうして話すようになったんだし、せっかくだから連絡先を交換しよう？」

「そうですね。この際ですし交換しましょう」

連絡先としてメッセージを簡単に送れるコミュニケーションアプリのIDを交換。

連絡先に同じ高校の先輩が追加される。地味に同じ高校に通う先輩では初めて連絡先を

交換した相手だな、とか少し思うところがありながらも、互いの部屋へと帰って行く俺と

お隣さんであった。

部屋に入り、スーパードで買ってきたかつ丼を食べ、来たるべき決戦に備える。

お米の封を解き放ち、引越した際に買って貰ったが、出番が無かった炊飯器に

洗ったお米をセット。

今時の炊飯器にはタイマー機能という便利なものがあるので朝に炊き上がる様に設定。起きた後におにぎりを作るよう海苔やらラップやらを用意した。

ついでに水筒に詰めるお茶の茶葉も分かりやすい位置に置く。

「これで、あとはいつともより早く起きて作るだけだ」

意気揚々と朝にはおにぎりを作ってやる。

準備を終えて、ちょっとした余暇を宿題やら動画を見てすごしたのち就寝した。

*

節約をするためにおにぎりを作るべく、少し早めにセットした目覚まし時計を止めた。顔を洗ってさっぱりした俺は手始めに炊飯器と同様に買って貰った、置物と化していた水筒にお茶を作って注ぐ。

次にするはおにぎり作り。

用意したラップの上に朝に炊き上がったばかりのお米に具をのせて握る。

ラップ越しにお米を握って形を整えた後、塩を振りもう一度握って海苔を巻いた。

「完成だな」

そのままラップに包んで持ち運べるように。

あ、そう言えば保冷剤を用意した方が良かったかもな。

季節は刻一刻と真夏へと向かいつつあり、傷んでしまう場合がある。

料理をしない俺がこの事を知っているのは、母親が保冷剤を入れ忘れてお弁当がダメになった経験があるからだ。

「まだ大丈夫だろ。教室にはエアコンもあるし」

おにぎりを風呂敷代わりのバンダナで包み学校のカバンに詰め込んだ。

ちなみに朝ご飯は残ったご飯で作ったもう一つのおにぎり。

いつもは菓子パンで済ませているので、この時点でかなり節約した気がするなと自分で自分を褒めていると、携帯に一枚の写真がメッセージ付きで届く。

「ああ、山野さんか」

写真はおにぎりの写真。綺麗な三角形をしていて美味しそう。添えられたメッセージは『私はこんな感じだよ！ 連絡先の交換したし、せっかくだからメッセージを送っちゃった』とてもフレンドリーで気さくな感じであり、俺もそれに応ずる。

「握るのがうまいですねっと」

メッセージを打ち、ただそれだけじゃつまらない気がしたので、俺も少し形が悪いお手製おにぎりの写真を撮りメッセージと共に送る。

『ぶきつちよだね』

『ですね』

『今回は私の勝ちだね』

勝ち負けを競い合っていたわけでもないのだが、冗談で勝ったと言い張られてしまう。そんな冗談交じりのノリについて行くべく俺もジョークを交えたメッセージを送る。

『つく、次は負けませんから！』

といった感じでおにぎりの話題で軽いやり取りをしていると、気が付けばそろそろアパートを出ないと不味い時間になっていたのでアパートを出る。

「あ」

「あ」

ちようどであつた。

先ほどまで、やり取りをしていた相手と出くわし、あ、とつい声が出てしまうも、別段慌てることもなく普通に会話が生じる。

「山野さん。さつきはどうも」

「ううん。朝から、メッセージを送りつけてごめんね。迷惑じゃ無かった？」

「いえ、全然」

「そっか、なら良かったよ」

二人とも行き先は同じ。気が付けば、肩を並べて歩き始めている。

「間宮君。おにぎりを作ったのは良いんだけど、保冷剤って使ってる？」

「今日は使っていないですね。というよりも、お弁当なんて作ることが無かったので、保冷剤なんて代物が無かったです」

「私もだよ。で、今日の気温的に大丈夫だと思う？」

「多分……大丈夫だと思います」

今日の最高気温は25度くらい。このくらいなら、保冷剤を入れてなくても大丈夫なはずではあるが、気になり始める時期のせいかな心配しかない。

今まで自炊を経験したことが無い者が色々手探りになっている状況であるのだから。

「お昼時に匂いを嗅いでダメそうなら捨てれば良いだけだしね。勿体ないけど」

「ダメになった場合、むしろ節約じゃ無くなると思うと、保冷材は必要ですよね……」

「だね。ところで、間宮君はおにぎりの具になりそうなのを色々買ってたけど、何をおにぎりの中に詰めたの？」

「一つは鮭フレックともう一つは昆布ですね」

「私は梅干しとおかかだよ」

色々な話をしながら学校へと向かう。

気が付けば校門。学年ごとに使っている昇降口が違うため、山野さんとは校門をくぐればすぐにお別れだ。

「ばいばい、間宮君」

「あ、はい」

*

それからなんだかんだお昼を迎えた。

大抵は幸喜と昼食を共にしており、今日も今日とて同じだ。

「ほら見てみる。成し遂げたぞ？」

机におにぎりとお茶の入った水筒を置く。

「おうよ。一応、聞いたから知ってはいたが、改めて見ると感激もんだな。おめでとさん。節約に一步近づいたな」

「まあな、これをきっかけにドンドン自炊に切り替えて行くつもりだ」

「でもよ、今日は思っていたよりも暑かったし、保冷剤を持ってきてねえみたいだが、大丈夫なのか？ まあ、今日の気温なら確かに暑いがなんとかセーフだと思いが……」

俺も心配していることだが、幸喜もこう言っているし、きっと平気だ。

傷んで無いはずだと信じながら、おにぎりを食べようとした時だ。

とある人物からメッセージが送られてきた。

『……なんかヤバそうなんだけど』

そんなメッセージを送ってきた相手は山野さん。

『どうしたんですか？』

すぐに返信が来た。

『なんかさ、おにぎりから酸っぱい匂いが……』

同じく、おにぎりを包んでいたラップを剥がすと、心なしか少しだけ酸っぱい匂いがする

ようなしないような……

「幸喜。このおにぎりの匂いを少し嗅いでくれ」

「お、おう。って、少し酸っぱい？ 匂いがするな」

「……だよな」

どうやら幸喜でも酸っぱいと口にする匂いらしい。

……さて、気温的には大丈夫だと思っていたんだが、食べたヤバそうである。

「くそ……、節約どころか損した。取り敢えず、おにぎりを食べるのはやめといて、^{こはげ}購入でパンを買ってくる」

悪態をつきながら、俺は昼食を求めカウンター式でパンや飲み物を売っている購買へ。

昼休みが始まり少し経っているため、購買には生徒達の列が長々と出来ていた。

そんな長い列に並ぶと、横にはお隣^{となり}さんの山野さん。

「だよね」

「ですよね」

何がと言わず通じあつてしまふ。

互いに作つて来たおにぎりを口にせず、代わりの物を買いに来たことを察したのだ。

購買の列は長く、暇^{ひま}を持て余^{あま}している俺と山野さんは自然と話を始める。

「で、間宮君。原因は何だったと思う？」

「原因ですか？」

「そうそう。だって、確かに今日は汗^{あせ}ばむ気温だけど、さすがにこの気温で腐^{くさ}るっていうのは聞いたこと無いよ？」

「調べてみましょうか」

「だね」

購買の後ろの方で待っている俺達にはたまりと時間がある。

文明の利器を使って、どうしておにぎりがダメになつてしまったのかを探り始めるとそれらしき理由に辿^{たど}り着く。

「私が腐^{くさ}らせた理由は熱を冷ましてからラップに包んで無かつたのが原因かも」

「同じくそうかもしれない」

理由はおにぎりの熱を冷ましてからラップに包まなかつたからに違^{ちが}いない。

温かいおにぎりはラップの隙間^{すきま}に水滴^{すゐてき}を生じさせ、それが雑菌^{ざつきん}を繁殖^{はふしよく}させる温床^{おんじょう}となり結果として腐食^{ふしょく}を促進^{そくしん}させてしまったのだ。

「はあ……。こんななら、自炊^{じし}なんてしなきゃ良かったよ。ほら、おにぎり代^{ひだ}を無駄^{むだ}にしちゃったわけだしさ」

山野さんが肩^{かた}を落^おとしながらそう言うので、俺もそれに続いて『そうですね』と言いきうになるもグツと堪^{こた}える。

「今日はダメでも理由が分かれれば、明日からはきつとうまく行きますって」

「そうかなあ……」

昼食をおにぎりに替えて、飲み物を持参する。

この効果は大きい。支出をかなり減らしてくれるのは違いない。

今日は失敗したが明日以降は成功させれば良い話。ここで諦めるのもおかしい話だ。

「という訳で、明日はリベンジマッチをしましょう」

「間宮君の言う通りだね。明日こそはきちんと頑張らないとだね」

話しているのも束の間、購買の列は短くなり順番が回って来た。

並び始めたのが遅かったせいで、まともなパンはあまり残っていない。まともなものと言えば……体育会系ですら買うのをためらう超特大4種のチーズが入ったパン。

サイズで言うと、コッペパンの4倍くらい大きさであり、ずっしりとした重量。

なんでこんなパンを売ろうと思ったのかを疑うレベルなのだが……なんだかんだで今日は残っているが、人気商品。

友達とシェアすれば普通のパンを一つ買うよりも安く済むし、なによりも味は抜群。

そのため、割と売れ残る事が少ないパンなのだ。

……とはいえた。一人で食べきれるものではないわけで、ここは諦めて不人気で残っているジャムもマーガリンも何も入っていない、ただのコッペパンを買うほかない。ジャムとマーガリンは別売りであるのだが、40円とちよっぴりお高いので今日はおにぎりという

失敗もあるし買うのは諦めよう。

なにせコッペパンは他のパン、例えば焼きそばパンよりも安くなっている訳では無く、ジャムを買えば普通に焼きそばパンよりも高くつくし。

諦めて購買のおばさんにコッペパンだけを頼もうとした時だ。

「間宮君。一緒にチーズのパンを買って分けない？」

「え、あ、はい」

「おっけー。おばさん。この特大チーズパン一つお願いします」

購買のおばさんとやり取りをして特大チーズパンを購入した。

ほぼほぼもう人が居なくなつた購買を少し離れてから立ち止まる俺達。

「んじゃ、分けっこしないとね」

山野さんがパンを握り二つに分ける。

包装の袋に入つたままで直接触れてはいない。

こうして、二つに分けられたパンの片割れを手にする。ちなみに購買のおばさんが気を利かせて袋をくれたので、持ち運ぶ際にそのままにするという事はない。

「じゃあね。間宮君！」

パンを分けるや否や、その場を離れて行く山野さん。

それもそのはず、お昼休みはだいぶ時間が経_たっている。

「俺も戻らないとな」

そうして、自分のクラスに戻ってきた時だ。

「おやおや、それは超特大チーズのパンだね。しかも半分になつてるといふ事は誰かと分けたの？」

クラスメイトのみっちゃんが話しかけて来た。

グイグイ来る系女子で何かと物事を仕切りたがる。高校生活初日に馴_なれ馴_なれしい感じの挨拶を交_{あひさつ}わして仲良くなった友達_{ともだち}の一人だ。

「ちょいとな」

「えー、哲君は幸喜君以外に友達がいなと思つてたのに」

「おい、酷いことを言うな。みっちゃんよ。俺にだってな、友達くらい……」

部活に入っていないので、クラスメイト以外の友達……山野さんだけだな。

「で、誰と分けたの？」

「内緒だ」

みっちゃんはグイグイ来る系女子。

言い換_かえれば、何事にも首を突_つ込んで茶化_{ちか}すよううざい系なのだ。

ここで山野さんの事を話そうものなら、グイグイ聞いて茶化してくるに違いない。

「こんなに仲良しな私にすら話せない友達……さては、女でしょ？」

「……さあ？」

「哲君の様子からして大体そうなんだろうけどね。で、どうなのその女とは」

「だからなあ……」

正直に言うともみっちゃんのこのグイグイとした感じが苦手だ。

本人自体は別に苦手ではない、どころか親しみを覚えるくらいだが、いかんせんこのグイグイ来る感じがどうしようもなく俺は苦手である。

「あはは、ごめん。ごめん。んじゃ、私はこれからお花を摘_つみに行ってくる」

うざい系女子みっちゃんから解放された俺はと言うと幸喜の下へと戻るが、

「まさか、俺以外の友達が居たとはな……」

「お前もか……。まあ、お前の言う通りなんだけどな」

昼休みは残り少なくなったが、幸喜と一緒に昼食をいつも通りに済ませた。

外を燦燦と照らす太陽が少しだけ落ち着きを見せ始めた頃。

おにぎりは失敗したが、節約を諦めたわけでは無い。

なので、食費を浮かせるためにもスーパーへと足を運ぶことに決めた。

何せ、スーパーでご飯のおかずを買ってくればそれだけで安く済みそうなのだから。

「スーパーのお惣菜とお米を炊く。これだけで、凄く節約になるはずだ。いや、おかずも作る様になったらもつと節約になるのか？」

思い立ったが吉日。

スーパーに行く目的はお惣菜を買うためであつたが、おかずを作るための材料を買うことに変更。

スマホで料理について調べると、生姜焼きなんて簡単そうで良さげだ。

生姜焼きを作ることに決めた俺は材料を買いにスーパーへと向かうべく、玄関の扉を開けた。

玄関から出ると、制服姿でスカートをなびかせる山野さんが玄関の鍵を開けている。

おそらく、今しがた学校から帰って来たのだろう。

「あ、間宮君だ」

「どうも、山野さん。今、お帰りですか？」

「そうだよ。今、学校から帰って来た。服を着替えた間宮君はどうしたの？」

「スーパーに買い物に行ってます。にしても、今日は暑かったですね。というか、まだ暑いんですが」

本当に夏の一步手前。夕方だというのに気温は高い。

暑さのせいで外に出るだけで汗が止まらなくなるほどだ。

「私もスーパーに行こうと思ってたけど。近場のコンビニで良いかなって思えるくらいに外は暑くて嫌になっちゃうよ……」

「せっかくですし、少しは頑張りましょうよ」

「分かってる。ちよつと、冗談で弱音を吐いただけだよ。今日はスーパーでお買い物する。コンビニで買うよりも絶対に安いもん。じゃなきゃ、今日のおにぎりの失敗分を取り戻せないし」

「おにぎりを持参して昼食にすることすら失敗するとは思ってませんでした」

「分かる。私もまさかおにぎりで失敗するなんて思ってたよ……。さ、行こ？」

行こ？　と言われて気が付けば、山野さんと一緒にスーパーへと歩き始めた。

自然と二人で行動する辺り、友達と言える関係になったとしみじみ思う。

「いえいえ、こちらこそ味気ないコッペパンだけにならず済んで有り難かったです」
 「話が変わるけど、間宮君はスーパーで何を買うつもりなの？ 私はお惣菜を買うつもりだけ」

「お惣菜を買おうと思ってたんですけど、おかずも作れば安くなるかなと思ひまして、生姜^{しょうが}焼^やきに挑戦^{ちせん}します」

「私も真似^{まね}して良い？ なんか、男の子である間宮君が節約を頑張ろうと料理する中、私だけしないって負けた気がする」

ふんと少し息巻く山野さん。

どうやら、俺の行動が山野さんに火をつけたようだ。

「分かりました。どっちがうまく調理出来るかちよとした勝負でもしますか？」

「やる。間宮君に女子力で負けてられないからね」

勝負という言葉に反応し、やる気に満ち溢^{あふ}れた山野さんと一緒にスーパーまで歩いている途中^{とちゅう}であつた。

「哲君じゃん」

今、山野さんと一緒に歩いているこの状況^{じょうきょう}で一番会いたくない奴^{やつ}と出会つてしまふ。
 昼休みにあれだけうざつたらしく構つて来たグイグイ来る系女子。

クラスメイトのみっちゃんだ。

横にはもう一人女の人がいて、俺達が通う高校の制服を身に纏^{まと}っている。

ちなみに制服に備え付けられている学年を示す校章の色は青であり、青は3年生の色を示しているので先輩にあたる人だな。てか、入学式で生徒会長として挨拶^{あいさつ}をしていた人だ。

「おやおや、哲君。女の子と一緒にとはお熱いね。んで、二人は一体どういったご関係なんですかあ？」

「別にどういった関係でもないわけで」

「ちつちつち。そんな風に歩いている時点でその答えは無いんじゃないかな？」
 につこりと、嘘^{うそ}つくなど言わんばかりのうざつたらしさ。

そんな彼女の問答からどう逃げようかと思つていた時だ。

「あいた」

みっちゃんの頭を小突^{こづ}く者あり。

出くわした時から、みっちゃんに話しかけられていたせいで触れることが出来なかったお連れの方だ。

「いい加減になさい。反応に困つてるじゃ無いの。悪かったわね。妹が強引に首を突つ込んでしまつて」

長い黒髪をなびかせた綺麗なお方はどうやらみっちゃんの姉らしい。

「けい先輩。さつき振りだね」

山野さんがみっちゃんの頭を小突いた姉に声を掛ける。

どうやら、二人は顔見知りどころか、さつき振りという口ぶりから学校で何かしらを話していたに違いない。

「で、やまのん。妹に首を突っ込むと言った手前、聞くのはあれだけでも、あなたはその子とどういう関係なのかしら？」

「友達だよ。友達。縁あって仲良くなっただけ」

当然の様に答える山野さん。

確かに狼狽える必要などなく、俺もみっちゃんに聞かれた時にそう答えれば良かったな。と思うも、あやつ的事だ。それで引き下がる訳が無いんだよな……。

「そう。ところで、やまのんと……」

俺の事を見てなんと呼ぼうか困る、山野さんがけい先輩と呼ぶ俺達と同じ高校に通う先輩。

その姿を見たみっちゃんが補足を入れてくれる。

「お姉ちゃん、横に居るのは哲君こと間宮哲郎君だよ。お友達が少ないから、フレンドリ

ーに哲郎君とでも呼んであげてね」

「さりげなく人の事を下げるのはやめなさい、みっちゃん。それでやまのんと哲郎君はどこに行くつもりなのかしら？」

「スーパードよ」

「そう。実は私達もちようどスーパードに向かうつもりよ」

「そうそう、お姉ちゃんに荷物持ちで来いって無理矢理……あたた。お姉ちゃん、こめかみがこめかみが……」

けい先輩にこめかみをぐりぐりとされて痛がつている。

俺を友達が少ないからとさりげなく下げられた後なので、みっちゃんが痛い目に遭う姿を見るのにどこか心地よさを覚える。

「さてと、生意気な妹への罰も済んだわ。せっかくだから、一緒にスーパードに行きましょう？ やまのんがほとんどの人が腐らせることのないおにぎりを腐らせる程の知識しかないのは知っているもの」

「……あ、哲君も腐らせてたよ！ お姉ちゃん！」

「みっちゃん。なんでそのことを知ってるんだ？」

「え、普通に笑嘻嘻と話している声が聞こえたからだけ」

「怖い。お前は俺のストーカーか？」

下げられた恨みをすぐに忘れるほど、お人よしではない。

みっちゃんを下げる発言をしていると、けい先輩がくすりとこちらを見て笑う。

「本当に仲が良いのね。まったく、それだというのに哲郎君は……。っと、みっちゃんが怖いから言わないでおくわ」

何かを言いかけるも、みっちゃんの睨みに負けて口を慎むけい先輩。

一体、何がどういことなのか意味が分からないが別に気にするような事は……って、気になるな。

「哲君。気になっているようだから言うけど、ぜーったいにお姉ちゃんが言いかけたことの続きは教えてあげないからね」

「なんでだ？」

「そりゃあ、あれだし」

蚊帳の外になりかけている山野さんが俺の肩をつんつんとして口を開く。

「間宮君。仲良さげだけどもみっちゃんみたいな子がタイプ？」

「全然ですな」

「即答とは酷いなあ哲君。私のどこが気に食わないの？」



心外だと言わんばかりのみつちゃんだ。

そんな彼女に俺はきちんと気に食わない理由を説明することにした。

「みつちゃんのグイグイと他人の家に土足で踏み込むような感じが苦手だな。そういうところを除けば別にそんなに嫌いではない」

「ほほう。なるほど、なるほど」

自分の事を下げられたというのにどこか誇らしげだ。こいつわざと俺に嫌がらせじみた行為をしているのか？

「……さて、そろそろ立ち話をするのはやめて目的を果たしましょうか」

けい先輩のその一言で、俺達はスーパーへと出向くのであった。

*

四人で買い物を終えて、けい先輩とみつちゃんとは帰り道が異なるため途中で別れ、山野さんと再び二人きりになる。

二人きりになったからと言って、何かが大きく変わるわけでもなく普通に話題を振る。

「けい先輩って凄く家庭的なんですね」

スーパーでけい先輩に色々と食材の選び方や大体の相場を教えて貰えた。

同じ高校生であるとは思えない程に知識が凄く感心ものだ。

「あの人は色々と苦労してる人だからね。にしても、生姜焼きを作るためとは言え、スーパーまで買い物に行くのは中々堪えるね……」

「ですよ……。なんだかんだで、遠いと言えば遠いですし。これから夏本番になるとしんどくなってきました」

スーパーまで行くのに不便だと言いあいながら歩くこと数分。

俺達が住んで居るアパートへ帰って来た。

「じゃあ、これで。おにぎりみたいに失敗をしないようにしましょう」

「そうだね。失敗しないようにしないとだよ。じゃ、生姜焼きが出来たら持つてくね」

「ど、どうしてですか？」

「間宮君が勝負って言ったんだよ。だから、互いに食べさせ合わないと」

なんで山野さんが生姜焼きを持って来るのか分からなかったけど、すぐに理解できた。

そう言えば、買い物に行く前にどっちがうまく調理出来るかよつとした勝負でもしませるか？ と俺が言ったのだ。

「良いんですか？ 男の料理を口にして」

「あー、そう言われると心配かも。使う調理器具を見せて？　ほら、一人暮らして洗わない人とかいて、間宮君がそういう人だと怖いし。台所の様子とか調理器具の写真を見せて貰えるかな？」

「分かりました。じゃあ、台所と調理器具の様子を写真で送りますね」

「うん。それじゃあね」

「はい、またあとで」

それぞれの部屋へと入って行く俺達。

自分の部屋に戻ると、台所の写真と使う予定のフライパン等が写る写真を送った。すると、山野さんからすぐさまに返事が来る。

『私よりキッチンを綺麗にしているかも……。全然平気だよ。食べさせ合って勝敗を決しううではないか。じゃあ、勝負開始！』

何の問題もなく生姜焼きをどっちがうまく作れるかの勝負が始まるのであった。

今回、用意したレシピは簡単。

醤油とすりおろしショウガとニンニク、みりん、日本酒でタレを作って肉を焼くだけだ。フライパンに薄く油を引き、豚肉に作ったタレを絡めて火を通す。

時間にして10分も掛かっていない。

完成して、山野さんに出来たとのメッセージを送った。

すると、5分後に山野さんがやって来る。

「お待たせ。そっちはどんな感じ？」

手には生姜焼きが載った皿を持っている山野さん。

俺も出来上がった生姜焼きをお皿に載せて、食べる際に使う箸を手にはしている。

「俺も出来ましたよ」

「味だね。玄関先で食べるのはちよつと行儀悪いけど。あ、箸を持って来るのを忘れた」
咄嗟に俺は自分の箸を差し出す。

それを受け取って、俺の作った生姜焼きを一つまみして口に運んだ。

「んつつ、あつつ」

生姜焼きは出来たて、口をハフハフとしながら俺が作った生姜焼きを食べている。

そして、咀嚼は終わり再び口は開かれた。

「うん、美味いよ。間宮君は自分が作ったのは食べたの？」

「あ、はい。味見しました」

「じゃあ、私のをあげる番だ。はい、どーぞ」

差し出されるは箸で摘まれた生姜焼き。それを俺は恐る恐るパクリと口にする。

何で恐れているかは簡単だ。

生まれて初めて、母と姉以外の女の子に物を食べさせて貰うのだから。

山野さんに生姜焼きをお箸で食べさせて貰った。それも山野さんが使ったばかりの箸で。

「どう？ 美味しい？」

感想を俺の顔を覗き込むようにして待っている。

すぐさまに出た俺の感想は本当のようで嘘であつた。

「凄く美味しいです」

美味しいのは事実だ。

でも、女の子に食べさせて貰ったシチュエーションの美味しさの方が勝っている。

「間宮君が作ったのと、私が作ったの。どっちが美味しかった？」

「え、いや、その……」

「あはは、分からないよね。同じ食材で同じものを作ってるし。私も、間宮君が作った生姜焼きと私が作った生姜焼きの違いなんて分かんなかったもん」

山野さんが場を締め括ってくれた。そのおかげで俺も冷静さを取り戻す。

「はい。そんな感じです。今回の勝負は引き分けて事で」

「そうだね。それにしても、自炊って良いかも。こんなに美味しいご飯が出来るとって考え

ると本当に良いね。……手間は掛かるけど」

「確かに手間は掛かりますけど、ご飯が凄く美味しくてそれだけで幸せな気分になります」

「なんか温かみがあるんだよね。それに、今回は調味料でなんだかんだお金が掛かっちゃ

ったけど、やっぱりお値段が安いのが良い」

本当に安い。それでいて量もあるとか、嫌と言うほど自炊の魅力を感じた。おにぎりでも

失敗したが、生姜焼きは大成を取めた。

失敗して、成功して、それを分かち合うことのできる山野さんが居ると言うのが本当に

プラスで楽しくて胸が躍っているのが嫌でも分かる。

「ボーッとしてどうしたの？」

「おにぎりでは失敗したけど、生姜焼きは成功したので、やっぱり自炊って悪くないなっ

て考えてました」

「うん、楽しいよね。私もなんだかんだ楽しいからもうちょつと頑張る」

「そう言えば山野さん。少ない量の豚肉が売ってなくて、少し量が多い豚肉のバックを買

つてきましたけど、山野さんは残りの豚肉はどうするつもりなんですか？」

「私はもう一度生姜焼きを作ってご飯の上に載せてお弁当にする。二回連続なのと、男っぽくてあれだけ良い考えでしょ？ ちなみにちゃんとご飯は冷ましてからお弁当に蓋を

するし。スーパーで買って来た保冷材もきちんと使う」

「生姜焼き弁当……。俺も真似て良いですか？」

「もちろん。ただ、お弁当だと冷たいし、今ほど美味しくはないだろうけど。あ、今回は豚肉しか使わなかったけど玉ねぎも一緒に炒めればかさましにもなるし、美味しいかも。まあ、玉ねぎは買って来て無いんだけどさ」

「成長してる気がしますね。っと、そろそろこのくらいで」

玄関先で生姜焼きを片手に持っていることもあり、長話はしたくない。

もう十分、長話をしていると言えはしているけど。

「じゃあ、またね」

「はい、また今度」

こうして、初めての料理らしき料理である生姜焼きは成功を収めた。

*

次の日。

少しかだけ早起きして、生姜焼きをご飯の上に載せて生姜焼き弁当を作った。

もちろん、粗熱は取った。これで傷みやすくはならないはずだ。

お弁当とお茶の入った水筒を手にし学校へと歩く。

「あ、間宮君。おはよ」

高校への道のりで山野さんと出会う。

そんな彼女の手には鞆に加えて保冷バッグらしきもの。

「その保冷バッグの中身はお弁当ですか？」

「そうだよ。お母さんが買ってくれたのがあったから使ってみた。で、間宮君はどうかかな？」
生姜焼き弁当を作ったのかどうかという事だろう。

真似ても良いですか？ と宣言しているからな。

「もちろんです」

「うんうん。あ、そうだ。これからは節約のためにお互いがサボりそうになったら言い合
う。ってのはどうかな？」

「良いですね。それ」

こうして、俺の、いいや違う。

俺と山野さんの節約生活は始まったのだ。

2章

俺と山野^{やまの}さんが通う高校は文武両道^{ぶぶりょうどう}を掲^{かか}げており部活動が盛^{さか}んである。

部活動が盛んな高校ではあるのだが俺は部活には入っていない。

理由は簡単で部活動に入ればお金が掛かるからである。ただでさえ、一人暮らしで親にかなり手痛い出費をさせているのだ。部活に入れば、部費や部活動で使う道具でかなりお金が掛かってしまう。

母には一度きりの青春だし部活には入って良いのよ？ と口を酸^{すっぱ}っぱくして言われたけれども入らなかった。

まあ、よくよく考えれば、中学に入っていた部活はバスケット部。シューズとマイボールに加え練習着と、かなりお金が掛かっていただけで、文化系の部活を選んでいればお金はそこまで掛からなかっただろうし、入っておけば良かったと後悔^{こうかい}している。

そんな後悔^{こうかい}をしている俺はと言うと、授業が終わり放課後は何も予定などないので普通^{ふつう}に家に帰るしかないのだ。

「今日も今日とて何かをしますか」

部活に入っていない俺にとって放課後は何もすることが無い時間とも言えるし、何かをすることが出来る時間だとも言える。

「にしても、暑い」

一応、夏前だというのに、暑さはすでに夏と同じくらいだ。

暑さに耐^たえきれずにエアコンの電源を入れてしまう。

食費^{しょくひ}だなんだで節約しても夏場のエアコン代で帳消しになりかねないと思いつつも、暑さには耐えられない。

しかし、逆に考えれば食費を節約しているおかげで帳消しになっているとも考えられる。苦しい思いをしてまで遊ぶためのお金を増やしたくないし、これで良いのだが……。

「やっぱり電気代が気になる」

部活に入っていない俺は人よりも部屋に長く居る。長く居れば居るほど部屋の消費電力は多くなるわけで電気代が掛かるのは決定事^{けつじ}項^{こう}だ。

「なんか電気代を節約できるいい案がないだろうか？」

と思いついてネットで電気代を節約する記事を調べるも、どれもいまいち。やっている手間に比べ、節約できるお金が少ないのだ。

仕方がないと諦^{あきら}めて、普通にネットサーフィンをしていた時だった。

「こ、これは！」

俺が好きなゲームの続編が発売されるという記事を見つけてしまう。
是非とも発売日に手に入れようと思うのだが……難しそうだ。

「本体を持ってない……」

ゲームをプレイするためのゲーム機本体を持っていなかった。

つい先日に出た最新鋭ゲーム機での発売となるらしい。

ゲーム機の価格は何と驚きの4万5千円。

正直に言うと、友達と一緒に遊びに行かないで、食費を切り詰めれば、ゲームの発売日まで何とかギリギリお金は貯まるだろう。

「ま、好きな作品のゲームとはいえ、そんな風に色々と犠牲に出来るわけが無い」

結論はゲームを買うために無理してお金は貯めない。

発売日に購入できなくとも、いつかは買えるように節約してお金を貯める事にした。

「エアコン代……」

数か月後に発売されるゲームは小さい頃からずっと追ってきたシリーズもの。

思い入れは凄まじく、発売日にプレイは諦めたものの、出来る限り早くプレイしたい。
ゆえにいつかは買えるようにと割り切ったが、節約という意識が一層表に出てきた。

エアコン代を節約するため電源を切ろうと手が伸びるのだが、

「……」

エアコンを切れば暑くて苦しいのだ。

でも、苦しい思いをすれば、ゲームを手に入れるのは着実に早まる。

「ダメだ。やっぱ無理」

体は快適さを選ぶ。でも、発売日は無理でもなるべく早くにゲームが欲しい。

何か出来る節約はないかネットで調べたところ、結局、食費と電気代を節約しろという記事しか見つからなかった。

そして、気が付けば夕方。

節約のためにもスーパーへ買い物に行こうと玄関を出た。

「間宮君。今日は暑いね。スーパーに行くの？」

ちょうどお帰りの制服姿でたつぷり汗をかいている暑苦しい山野さんと出会う。

俺と違って帰りがいつも少し遅い山野さん。とはいえ、部活動に入っていないと聞いた覚えはあるし、何かしらの委員会に入っており、その活動で帰るのが少し遅いかただ単に友達と少し話してから帰って来ているのだろう。

そんな、帰る時間が違うことについて少しばかり考えながらも、適当に話題を見繕う。

「はい、これからスーパーに行こうかなと。なにせ、これからの節約はより一層気を引き締めないといけませんし」

「金欠になっちゃったの？」

「いえ、違います。実は欲しいゲームが発売される事になりました。でも、ゲーム機本体を持っていないのでそれも買うとなるとお金がかなり必要なんです。だから、節約をもっと頑張ろうという訳です」

「なるほどね。私も似た感じかな……。最近、ノートパソコンの調子が悪くてね……。親が使ってたお古で中々にぼろいから新しいのが欲しいな〜って感じ？」

「今時の女子高生なのにノートパソコンを使うとか意外ですね」

「そう？　なんだかんだで、画面は大きいし、調べ事をしながら動画を見られるし、画面が大きい分一度に表示できる情報量が沢山だから使い勝手が良いじゃん」

「確かにそうですね。今はスマホやタブレットで事足りるとか言われてますけど、パソコンに慣れると全然物足りないですよ」

「うんうん。で、私もこれからノートパソコンを新調するために節約を頑張るけどさ。こゝろ暑いと、スーパーまで買い物に行くのが面倒だよ……」

頭を悩ませる山野さん。

何かいい方法は無いかと考えている素振りを見せた後だ。ちよつぱり申し訳なさそうな表情で俺にお願いをしてきた。

「間宮君が私の分も買っ来てくれないかな〜」

確かに俺はスーパーまで買い物に行くし、山野さんの分も買っ来て来ることは可能。

一方で俺だけが損する感じが否めないなど感じるも、山野さんの一言で吹き飛んだ。

「あ、もちろん、今日は間宮君がっただけで今度は私が間宮君の分も買いに行くから」

「分かりました。二人でスーパーまで買い物に行くのではなくて、交互に行けば時間の節約になりますしね。それで、山野さん。今日、俺に買っ来て欲しいものは何ですか？」

「んー、悩むね。ところで今日は何を作るつもりなのかな？」

山野さんは俺が作る料理が何なのかと訊ねて来た。

今日、俺が作ろうとしている料理は野菜炒めである。一人暮らしを始めてから、野菜が不足しがちな気がするからだ。

「今日は簡単に野菜炒めでも作ろうかなと。一人暮らしを始めて野菜が不足しがちなのを実感しているの」

「なる程ね。じゃあ、私も真似させて？」

「ちなみに、キャベツとかを一玉買うのは使い切れないかもしれないので袋詰めされたカ

ツト野菜ですけどね」

「カット野菜の方が高いけど、使いきれなかったら勿体ないもね。って、待った、間宮君。キャベツとかをさ、私と間宮君で半分にするれば使い切れちゃうんじゃない？」

「確かに」

「でしょ？」

買い物に行く回数も減らせるのに加えて、山野さんと買って来たものを半分にすることで余らせて腐らせることを防げる。

山野さんという心強い味方を手に入られてラッキーだ。

「じゃ、色々買ってきますね」

「うん、任せた。もちろん、明日は私がスーパーまで買い物に行くからね」

*

時間は過ぎるのが意外と早く、気が付けば節約を始めて1週間と少しが経った。

節約を志す仲間である俺と山野さんはスーパーまで買い物に行くのを交互に行う事で時間を節約するのに加え、野菜を半分にすることで余らせるリスクを減らすという関係へ。

そのおかげでほぼ毎日の様に山野さんとは話をしている。

現に今も、今日はスーパーで何を買ってくればという話をしている最中だ。

「今日は俺がスーパーまで行く日ですけど、何を買ってくれば良いですか？」

「あ、今日は大丈夫だよ。色々と買いたい物があるし間宮君がスーパーまで買い物に行く日だけど、私も行く。さすがにたくさんお買い物をお願いするのは申し訳ないからね」

買いたい物が多くあるとの事で、今日は久しぶりに山野さんと二人でスーパーまで買い物に行くことになった。

その買い物をしている際であった。

お総菜コーナーで揚げ物をジューツと眺めている山野さん。

「どうしたんですか？」

「揚げ物に挑戦したいなって。ほら、もう1週間以上も頑張ってるし難しい料理に挑戦してみたくない？」

「確かにそうですよ……。揚げ物に挑戦したいのは俺もです。でも、手間とか油跳ねが怖いんですよ」

「一人で挑戦するのは心細い。という訳で、間宮君。私と一緒に挑戦してみない？」

心細さを解消するために俺も巻き込む。

実にいい案である。

実際問題、俺も揚げ物を作ってみたいと思ってたし、一人で油を扱うのが山野さんと同じく怖いと思ってた俺にとつてもまたない機会だ。

「分かりました。俺も一人で挑戦するのは心細いのでお願いします。何を揚げるのか決まってるんですか？」

「普通に鶏の唐揚げにしようかなって思ってる。多めに作っておけば冷凍してお弁当に使えるからね。あと、てんぷらとかフライは難しいイメージだし」

「じゃあ、唐揚げにしましょうか」

「だね。唐揚げを作るためのお肉を買って帰らないと」

話が決まったので、お惣菜売り場を離れお肉売り場に向かいなるべく良いものを選ぶ。意外とお肉というのは鮮度の差があつて、色が艶やかな物ほど新鮮で美味いらしい。肉料理における味の決め手はやはり肉の味。ここだけは妥協するなとクラスメイトのみっちゃんの姉である家庭的な先輩から教わったからな。

「ところで、間宮君。どのくらい唐揚げを作る？」

「たくさん作りましょう。油とかをたくさん使うのならたくさん作らないと勿体ないので」

「じゃ、がつつりと作らないとダメだね」

鶏モモ肉を大量に購入してスーパーで安い物を終えるのであつた。

「いやー、にしても間宮君が居るおかげで安心して揚げ物に挑戦できるよ」

「意外と怖がりなんですね」

「まあね。帰ったら気合を入れて作らないと。なにせ、鶏肉を大量に買ったんだからね」失敗したら大損の量。これは骨が折れそうな調理になりそうだなと思っていた時だ。

「という訳で、間宮君。どっちの部屋でやるの？」

「ん？」

どっちの部屋でやる？

一体、山野さんは何のことを言っているのだろうか？

「言い出したのは私だし、私の部屋だよ」

「待ってください。ナンノコトデ？」

「そりゃあ、揚げ物だよ。一緒に挑戦するんだからね」

「一緒に挑戦って文字通りに一緒にという事ですか？ てっきり、それぞれの部屋で別々に調理すると思ってたんですけど……」

揚げ物を作るまでは一緒。

でも、互いの部屋でそれぞれ作ると俺は思っていたのだがどうやら違うらしい。

「意味なくない？ 油を使うのが怖いんだし二人で立ち向かわない」と

「いや、まあ。そうなんですけど」

もつともない分だが抵抗感が凄まじい。

山野さんと一緒に料理をするためにはどちらかの部屋に上がり込むという事だ。

それはそれは、思春期真っ盛りな俺にとってはかなりの大事件である。

「もしかして、女の子の部屋に上がるのに緊張しちゃってる？」

思春期真っ盛りな俺のうろたえ方に向けられる山野さんのにやにやとした視線。

そのことに対し俺は抵抗を感じてしまう。

「全然ですね。思い返せば、普通に女の子の部屋に入ったことがありますし」

……まあ、小学生の時だけだな。

威勢よく山野さんのにやけ顔に対抗してみた結果は何とも虚しい事に見透かされている。

普通に小学生の時とかそういうあれでしょ？ という顔で見つめられているのだから。

「山野さんこそ俺の部屋に上がり込む時、緊張はしないんですよね？」

「そ、それは……まあね。緊張しないよ？」

絶対に嘘である。俺の部屋に上がり込むのに緊張するという顔をしている。

「分かりました。じゃあ、山野さん。俺の部屋で揚げ物に挑戦しましょう」

「わ、分かったよ。間宮君の部屋で唐揚げを作るって事でオッケーかな？」

「はい。部屋で待ってるので来てくださいね」

気が付けば、俺の部屋と一緒に唐揚げを作る事となったのであった。

スーパードから帰宅後。

揚げ物は普段よりも服が汚れてしまうので、汚れても良い服に着替えてから来るそうだ。

そんな山野さんが来る前に俺はと言うと台所周りを綺麗にする。普段生活している部屋は別に片付ける必要などないの言うまでもない。

なにせ、台所と部屋はドアで仕切る事が出来るのだから。

わざわざ唐揚げを作るためにドアを跨がせて部屋に入れる必要などない。

台所周りを軽く綺麗にし終えた時だ。

チャイムが鳴り、山野さんが来た事を知らせてくれる。

部屋に招き入れるために玄関を開けると、そこにはなんと言うか普段じゃ絶対に見る事の出来ない山野さんの姿があった。

半袖のTシャツ。少し短い気のあるハーフパンツ。部屋で過ごすための格好だ。

「お待たせ。入っても良い？」

「どうぞ」

「お邪魔しますっ」と

靴を脱ぎ、すぐに直結している台所を見つめる山野さんの第一声はこうだ。

「男の子の部屋に上がるのって初めてだけど、意外と緊張しないもんだね！」

と言っているが、なんと言うか物凄く肩の位置が高く、あからさまにいつもより姿勢が正しい気がしてならない。

「さすが山野さん。」と言いたいところですが、誰でも異性の部屋に初めて上がれば緊張しますって。肩の力を抜いてリラックスしてください」

「閨宮君に私の部屋に上がるのに緊張してる？ とか煽った身としては屈辱だけど、やっぱり異性の部屋に上がるのはちょっとびり緊張するね」

「ぼちぼち、唐揚げを作り始めましょうか」

「だね」

山野さんと一緒に唐揚げづくりを始めた。

最初は鶏肉の処理だ。

二人でまな板に載せた鶏肉の小骨や、ちよとした筋を綺麗に取り除く。

綺麗になった鶏肉を食べやすいサイズにカットするのだが、俺の部屋には包丁が一つしかないので代わる代わる切ることに。

山野さんが部屋から包丁とまな板を持ってこようかと、と言うも、まな板をもう一枚置くスペースなどないので包丁が増えた所で意味が無い。

一度、鶏肉を切る作業だけは別々にとも考えたが、せっかく二人での料理。わざわざ別行動するのはつまらないので却下である。

「一個はこのくらいで良いよね？」

カットした鶏肉がこの大きさで良いかと俺に確認を取る山野さん。

「そのくらいで良いんじゃないですか？」

「おっけー。じゃあ、ドンドン切るね」

鶏肉を手際よくカットしている最中だ。

「指切れちゃった……」

山野さんが指を切ってしまい、血が滲み出す。

「大丈夫ですか？」

「このくらい、へーき、へーき。少し待てばすぐに血が止まると思う」

少し待てば血は止まるだろうが、処置をしておかないとダメなのは言うまでもなく、台所から離れ絆創膏と消毒液を手にして山野さんの下へ戻る。

「山野さん。絆創膏を巻きますね」

「女子力高いね。私の部屋には絆創膏も消毒液も無いよ？」

切った指先は俺の方を向く。

爪が綺麗に切り揃えられた指に付いている血をふき取りながら話を続ける。

「姉さんが買ってくれたので、俺が買い揃えたわけじゃありません。たぶん、姉さんが居なければ普通に部屋に絆創膏も消毒液も置いとかないでしょうね」

「間宮君ってお姉さんが居るんだ」

「一人暮らしも姉さんの支援で出来ているようなものですから本当に頭が上がりませんよ」
親と姉さんの支援によって今の生活は成り立っているのだ。

ゆえに親と等しく姉さんには頭が上がらない。とか考えながら山野さんが切った指先に消毒液を吹きかける。

「ひゃっ！」

あられもない声。

その声を上げた本人はと言うと、顔を真っ赤にしてか細く文句を垂れる。

「急に間宮君が消毒液を吹きかけるから変な声出ちゃったじゃん……」

変な声を出して恥ずかしがっている姿が可愛らしくて、ついもう少しだけ見てみたいという気が働いた。

「そうですか？ 可愛い声だったと思うんですけど……」

「くう。生意気な間宮君め。でも、私のためを思って消毒液を吹きかけて治療してくれてたのを考えると怒れないじゃん！」

煽る俺に怒っても良いのに、怒れないと言ってしまふところがまた可愛い。

そんな彼女の指に絆創膏を巻いた。

それから何事もなく、落ち着いてから鶏肉をカットするのを再開。

かなりの量の鶏肉を一口大のサイズに出来た。

特大のフリーザーバッグを広げて、その中に入れて醤油、すりおろしたんにくとシヨウガ、料理酒、隠し味のはちみつを入れて揉み込む。

「次は……30分寝かせる」

普段なら道具の片づけをしていればあつという間に時間は過ぎるが今日は違う。

俺が唐揚げに味を付けている際に山野さんが切った指先を庇いながら包丁やまな板を洗い終えてくれている。

そのため30分間という暇な時間が生まれてしまったのだ。

「暇ですね」

「だね。ところでさ、間宮君。ちょっとだけ、さっき絆創膏と消毒液を持ってきたあの部

屋のドアを開けても良い？」

あの部屋のドアとは台所とベッドのある居間を区切るためのもの。

絆創膏と消毒液を取りに行く際に少しばかり見えたのだろうが、それでも依然^{いぜん}としてはつきりと見えたわけじゃ無いしな。

分かる。俺だってそうだ。

確かに、同年代の一人暮らしの部屋だ。どういう部屋に住んで居るのか気になる。

「……まあ、良いですよ」

別にやましいものがあるわけでもなく、普段から綺麗にしている。

普通に許可を出すと山野さんは恐る恐る俺の部屋のドアを開けた。

「普通だね」

「でしようね。なんにも面白い事なんてありませんよ？」

「で、どうなの？ エッチな本とかつてあるの？」

しれっとんでもない事を聞かれたが、この程度で狼狽^{うろた}える俺ではない。

「ご想像にお任せします」

敢^あえて答えは出さない。

俺がそういう本を持っているのか、持っていないのかで大いに悩^{なや}んでくれ山野さん。

「そつか。間宮君はエッチな本を持っていると」

「ちょ、なんでそんな勝手な決めつけを……」

「間宮君がご想像にお任せしますって言ったんだよ？ という訳で、私に消毒液を急に吹き掛けて変な声を出させるような子だし。エッチな本を持ってもおかしくないからね」

「すみませんって」

軽い冗談^{じやうたん}で話を咲^さかせる。

普通に部屋を見せた。

唐揚^{からあ}げを寝かせている間、ずっと立っているのもあれなので山野さんを部屋に招き入れるとしよう。

「部屋で時間が経つのを待ちましょうか」

「え、良いの？」

「部屋に上がられたところで別にどうって事は無いので。適当にクッションの上に腰^{こし}を掛けてごゆるりとくつろいでください」

「お言葉に甘えてお部屋で休ませて貰^{もら}うね」

友達が来ることを見越^{みこ}して多めに用意してあるクッションを尻^{しり}に敷^しき、山野さんは俺の部屋に座り込む。

「テレビでも点けましょっか」
 適当に点けたテレビを見ながら、どうでも良い話を話していたらあつという間に30分が過ぎ去った。

*

唐揚げの調理はいよいよ佳境。油はすでに高温。

漬け込んだお肉に小麦粉をまぶし油で揚げろのみ。

言葉で言えば簡単なのだが、高温に熱した油を前にしてビビらないわけが無い。何せ1週間前から料理を始めた素人である。

「……緊張しますね」

「うん。緊張する。じゃあ、まずは私からお肉を油に投入するね」

緊張しながら熱した油に鶏肉を入れる山野さんの腰は変に引けていて、つい笑ってしまいうことになるも本人は至って本気なので笑うわけには行かない。

もし、笑って山野さんの集中力が途切れて怪我に繋がったら大変だし。

「山野さん。怖いからって投げ入れちゃダメですよ？」

「わ、分かっている。そーつと、そーつとでしょ？」

山野さんはそーつとなるべく波を立てないように鶏肉を投入した。

すると油で揚げが行くのを知らせる小気味良い音が部屋中に響き渡る。

油は跳ねているが、しっかりと距離を置いていればなんてことは無い。

とはいえ、跳ねるものは跳ねる。パチンと大きな音を立てて油が山野さんを襲う。

「つつ！」

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。ちよつと熱かったけどね。ま、こればかりは仕方ないね。揚げ物だし」

油跳ねは仕方がないと割り切る山野さん。

そんな山野さんと俺は油を恐れながらも唐揚げを揚げて行くのであった。

そして、第一陣が揚げ上がった。

まだまだ、揚げていない状態の鶏肉は残っているので、揚げなければいけないが、それでも我慢が出来ない俺達。

「味見しないとね。ちゃんと成功してるかどうかを」

味見をするために棚から箸を取り出し山野さんに渡す。

こんがりとした色づいた唐揚げを箸でつまみ口に入れる山野さん。

熱そうに口をはふはふとさせながらも咀嚼^{そしやく}していき、口の中が綺麗^{きれい}になった途端^{とたん}に山野さんは感想を發した。

「火傷^{やけど}した」

だらうな。あれだけ、熱そうに口を動かしていれば火傷して当然。

「で、肝心^{かんじん}の味はどうでした？」

「凄く美味^{おい}しいよ！ サクサクで冷食とは全然^{ちが}違う」

「じゃあ、俺も」

火傷すると分かっていても、我慢できずに熱々の唐揚げを口に入れた。

口いっぱいには広がる唐揚げの肉汁^{にくじゅう}。

隠し味のはちみつの効果のおかげか、お肉は心なしに柔らかい^{やわ}。

「美味しいです。じゃんじゃん、揚げましよう！」

それから、俺と山野さんはたぐさんの唐揚げを揚げていくのだった。

で、気が付けばすべてを揚げ終わった頃^{ころ}には30分が過ぎてている。

「これで、全部だね。いやー、苦勞したよ」

「結構時間が掛かっちゃいましたね。さてと、後はこの唐揚げでご飯を食べるだけです」
出来上がった唐揚げをおかずにご飯を食べる。

本日のメインイベントなのだが、山野さんの顔つきが凄くやつてしまったという顔だ。

……ああ、そういう事か。

「もしかして、ご飯を炊^たき忘れました？」

「あはは、うん……。あと、冷凍^{れいとう}ご飯も無い」

「分かりました。せっかくの出来立ての唐揚げ。白いご飯が無いのは勿体^{もったい}ない。なので、うちで炊いたご飯を山野さんにお裾分け^{すそわけ}します」

「え、良いの？」

「はい、多めに炊いたのでたくさん食べて大丈夫ですからね。と言うか、せっかくなのでもうここで食べて行きませんか？」

普通^{ふつう}に山野さんを部屋に入れた。

わざわざ、部屋に戻らせて食べさせるよか、一緒に食べた方が効率的。

いいや、二人で食べたほうが楽しくて美味しいのが一番の理由だ。

「分かった。お言葉に甘えてここで食べて行くね」

それから俺と山野さんは二人で唐揚げをおかずにご飯を食べるのであった。

3章

山野さんと料理のお裾分けをする仲になってから2週間が経った頃だ。
ちなみにお裾分けをする仲になった理由は簡単だ。

唐揚げと一緒に作った次の日に山野さんが俺の部屋を訪れて来た。

『これ、昨日のお礼だよ。ほら、場所とかも提供して貰った上にご飯まで貰っちゃったから』

タッパーに入っているのは炊き込みご飯。

鶏肉とごぼうと人参、キノコが入った美味しそうな一品。

『わざわざありがとうございます。今日は筑前煮を作ってみました。良かったら、少しお裾分けさせてください』

『良いの？　なんか、また私が恩を受ける感じになっちゃうけど』

『じゃあ、また何か作ったらお裾分けをください』

『もちろん。んじゃ、筑前煮を有難く貰う。炊き込みご飯を作ったは良いけど、おかずはどうしよかなって感じで、もう一品おかずが欲しかったし』

このような感じで俺と山野さんはお裾分けをする仲となったわけである。
で、そんな関係になってから2週間が経ち、俺はある事に気が付いた。
最初でこそ、山野さんの事をお隣さんで高校の先輩としか思っておらず、仲が良い友達
そんな風に思っていたのだが、気が付けば山野さんの事が気になって気になって仕方が
なくなっているのだ。

まあ、気になるの正体をもっとはっきりと言えはこうだ。

『山野さんの事が好きだ』

別に何か大きな出来事があったという訳ではない。

お裾分けをしたり、一緒に料理したり、スーパーへ買い物に行く際、交互に行く。
劇的な出来事があったわけでは無く、ありきたりの日常であった。

でも、そのありきたりの日常の中で山野さんの魅力を知った。

ちよっぴり年上風を吹かす。

冗談で場を和ませる。

決して理不尽な事で怒らない。

何よりも、一緒に過ごしていて嫌じゃ無くて本当に楽しい。

「色んな魅力を知ってしまった」

顔が可愛いからとか、スタイルが良いからとか、絶対にそういうのが理由で好きになつたわけでは無いと言い切れる。

「山野さん……、山野さん……、山野……ん？」

そんな思いを馳せる相手の事で気になった点の一つ。

「あれ？ 山野さんって山野さんで……山野……」

出て来ない。

山野さんの名前が出て来ないのだ。

名字は山野。名前は……出て来ない。

「……まじか」

下の名前も知らない相手を好きになったことに驚きを隠せない。

そして、今更になつて山野さんの下の名前を聞こうにも聞けるような雰囲気ではない。

「ど、どうすれば良いんだ？」

もしもの話だ。山野さんに名前を聞いたらどうなるんだ？

『間宮君。私の名前を知らなかったんだ……酷いね』

幻滅される？ 今となつて名前を知らないと打ち明ければ幻滅されるかもしれない。

まあ、山野さんに限ってそんな事は無いと思うのだが、好きな人に少しでも幻滅され

るようなリスクのある行動は取りたくない。

絶対にこの程度の事で山野さんに幻滅されたり、嫌われたりしないと分かっている。

「山野さんの名前を知らないことをバレずに知ろう」

密かな戦いが今始まるのであった。

名前を知ろうと思ひ始めた次の日。結局のところ、山野さんの名前を知る方法は思ひついていない。

「山野さんの名前を知る方法……」

学校までの歩き道。ちよつとした空き時間を悩み事に費やす。

「あ、そういえば」

名前を知ることのできる機会がある事を思ひ出す。

賛否両論ではあるが俺達の通う高校では試験が行われた後、成績上位者を学校の掲示板に張り出すのだ。

そろそろ期末試験が近く、結果が出れば成績上位者の名前が掲示板に張り出される。

山野さんは成績が良いと言うか、トップクラスに頭が良いらしい。つまり、山野さんはまず間違_{まちが}いなく名前を張り出される。それを見れば下の名前を知ることができるという算段だ。

「よし、これでいける」

無事に山野さんの下の名前を知らないという悩みの解決の糸口を見出した俺は、軽やかな足取りで今日も学校での生活を送ろうと歩く。

学校に着く間際、クラスで一番仲良くしている友達、幸喜_{こうき}と出くわした。

「よ、幸喜」

「お、おう。今日は上機嫌_{じようきげん}そうだが、なんかあったのか？」

「そうか？ 普通だと思うが……」

口ではそう言っているが、山野さんの下の名前を知れるというちよつとしたわくわく感_{かん}は明らかに上機嫌へと導いている。

「ま、普通なら良いんだがよ。そう言えば、期末試験が終わった後、どこに遊びに行くんだか決めようぜ」

期末試験が終わった後は羽休めとして皆_{みな}が皆、遊びに繰_くり出す。特にこの時期では、試験が終わった後、皆でどこに遊びに行くかと相談する季節でもあるのだ。

道すがら幸喜以外の友達とも出会い、試験前なのに気楽な事でどこへ遊びに行くかと相談する。

「どこでも良いんじゃないか？ ま、カラオケとかボウリングとかそこら辺だろ」

とある奴_{やつ}が言う。

「だな。てか、女の子と遊びてえー」

とある奴_{やつ}が続いて言った。

「おい、誰_{だれ}か。女の子を誘_{さそ}えるような奴はいねえのかよ」

女の子と遊びたいお年頃_{としごろ}な高校生男子だが、遊びに誘_{さそ}えるような女の子は居ない。

「はあ……。モテてえな……」

「だな……」

季節は夏前。

彼女が欲_ほしくなる季節だ。

夏と言えばイベントがたくさん。夏祭りに花火大会、海、山、川、となんでもありだ。彼女が居れば、そういったイベントを楽しく過ごせるのは言わなくても分かる。

モテない男諸君である俺達は、どこへ遊びに行く相談から、どうにか彼女が出来ないかと話題が変わった。

野郎^{やろう}どもの嘆^{なげ}きに耳^{みみ}を傾^{かたむ}けているちようどその時であつた。

「なにに、モテたいの?」

みっちゃんが話に割り込んでくる。

男子がモテたいだの言っているのを面白がつて近づいて来たのだろう。

「ん、そうだよ。俺達はモテたい。女の子とキャッキャウフフな青春を送りたい」

幸喜がみっちゃんに言う。

それに頷^{うなず}く野郎ども。俺も同じく頷くと、

「ちなみに、みんなに交^{まじ}り合^あひつて頷^{うなず}く素振^{そぶ}りをしているけど、割と女の子と仲良くしている裏切り者が一人いるね」

みっちゃんの一言で血気盛んになる男たち。

一方、俺は血気盛んになるところか血の気が引いて汗^{あせ}が止まらない。

「ちなみに、裏切り者は哲君^{てつくん}だよ! んじゃ、後は野郎どもでお話し合^あいだね!」

爆弾を残してみっちゃんは俺達の下から去って行き、同じく高校に向けて足を動かす他の友達の下へと駆^かけて行つた。

「そう言えば、哲。お前。あの特大チーズパンをなぜか半分こにして持つて帰つて来た事があつたよな?」

友達である幸喜の間宮哲郎^{てつろう}、あだ名は哲の俺へ送られる熱い視線。

野郎の視線などまったくもって嬉^{うれ}しくなどない。

クラスメイトの大半からみっちゃんと呼び親しまれる仕切り屋である学級委員のせい、俺は窮地^{きうぢ}に立たされているとしか言いようがない。

「な、何のことだ?」

幸喜どころか通学路で出会つた他の友達にも妬^たましそうな目を向けられた俺は言い淀^{よど}む。ヤバイなあ……。こいつらに山野さんとの関係を知られたくない。

山野さんとあわよくばとか思つて、俺の家に訪れてきそうだし。

「洗いざらい吐^はけ」

「取り押さえろ」

「お前ら、裏切り者を逃^にがすな」

これは、話さざるを得ない流れとしか言いようがないかもしれない。

この学校に通う山野さんという女子生徒とお隣さんで、なんだかんだで仲良くしているという事を。

だが、変に噂^{うわさ}されて山野さんに迷惑^{めいわく}を掛^かけたくないので俺は口を閉じる。

「話さないからな?」

みっちゃん。貴様の事は許さん。
 そう思いながら、野郎どもから山野さんの事を隠し通すのであった。

*

朝、通学路で嫌というほど野郎どもの質問を受け疲れ気味な俺に、クラスメイトのみっちゃんの話しかけてきた。

「哲君。朝は災難だったでしょ？」

「みっちゃんが原因だろうが。あれか、お前は俺を困らせて楽しんでるのか？　なあ、そうなんだろう、なあ」

「えー、だって、哲君が明らかに接点無さそうな女の子と一緒にスーパーでおかい」

大きな声で周りに聞かせるがごとく口を開くので強引に手で口を塞ぐ。

「んー、んー」

話させるという熱い意志を感じる中、これ以上手で口を塞いでいる方が絵面的にヤバい気がしたので手を口から放す。

「ぶはあ。まったく、女の子の口を強引に閉じるなんて最低だね」

「お前がまた変に噂が立つようなことを言おうとしたのが悪い」

文句を言い手についた唾液を拭いながら抗議する。

「んで、んで、あれからたまに二人で歩いてるのを見るけどどうなってるのかね？」

まだ続けるか……。

「いや、あの、他の人が居るからその話はやめてくれないか？」

「えー、だって。クラスにしか友達居ないような男の子が年上の先輩と歩いているのを目撃したら気になって気になってしょうがないのは私だけじゃないはずだよ？　あんなのを見せつけられたせいで私は夜しか眠れない体に……」

「夜眠れていれば十分だろうが」

もうやめてくれ。

本当にやめてくれと思いつつ俺はみっちゃんにこう言った。

「お前、俺を困らせるような事してるが、何か恨みでもあるのか？」

「さあ？　どうだろうね。それじゃあ、1限は体育だし私はそろそろ着替えるために更衣室に行くね！」

みっちゃんはそれなりに大きな声で話していたのだ。

クラスの中で俺が女の人と歩いていたという噂は広まってしまふ。

本当に変に勘違いかんちがひされないことを祈るばかりだ。

勘違いが進むようなら、しっかりと話しておかないとダメかなとか思いながら、俺も1限の体育に向けて準備を進めるのであった。

*

野郎どもに加えてクラスの女子の一部にすら俺がこの高校の先輩と仲が良いと噂される。人間関係ができ、落着きを見せ始めた1年生の夏休み前、浮足うきあし立った話題が出れば当然食い物にされる。

「なあ、教えろよ。哲」

幸喜からもしつこく、俺がどんな女の子と歩いていたのかを質問されまくる。

もういつそのこと、山野さんの事がある程度打ち明けてしまっても良いかも知れない。勿論話すとしたらある程度に留める。お隣となりさんという格好の餌食えじきになるようなネタは伏せないとダメである。

俺だけが迷惑ごうびを被るのは良いが、山野さんに迷惑は掛けられない。

「絶対に言わないからな。相手に迷惑が掛かったらどうすんだよ」

「つち、しけた野郎だぜ」

とまあ、男子からは質問攻め。

女子からは噂が飛躍ひやくして『間宮って彼女がいるんだって』と言われ続ける。

面倒めんどうくさいなあと思ひながら、家に帰るべく用意を始めると、みっちゃんが俺の下へやつて来る。

「ねえねえ、哲君。実際問題、どんな関係なの？」

「教えないからな。いい加減しつこいぞ」

うざったらしいので、話にあまり応じず帰りの準備を終え、校舎を出て歩き始める。

「哲君。今日はその後どうするの？」

「スーバーに行く」

「へー、まだちゃんと自炊じすいを続けてるんだ。偉いけど、哲君らしくないね」

褒められてるんだか煽あおられてるんだか。

そして、普通ふつうについて来ている。そんなに俺の浮足立った話が好きなのだろうか？と思ひながらあらしい続けた。

「まさか、スーバーまでついて来るなんて思いもしなかったぞ？」

「ん？ まあ、ほら私って家庭的な女の子だからお夕食のお買い物もあるし、別にスーパ

「だってたら跡^{あと}をつけても良いかなうなんてね」

「へー」

適当に返事をしながら、スーパーの中に入った。

入ると同時に、とある人物が居るのを目撃してしまう。

「こっちとこっちどっちが良いと思う？」

手にはナスを持った山野さん。

一人ではなく、みっちゃんの姉であるけい先輩と一緒に。

今日は俺が買い出しの日だが、自分の分は自分で買うから買って来なくて良いと言われてたのはけい先輩とスーパーで買い物をするからだだったんだな。

「あのー、お聞きしますが、間宮哲郎君とはどのような関係なんですか？」

俺の視界から消えたみっちゃんは山野さんに話しかけていた。

さすがにぐいぐい行く系女子。行動力が段違いだ。

「えっと。間宮君との関係？」

俺の話題が出たせいか、近くに俺が居るのかもしれないと見回す山野さん。

目が合い、二人して苦笑いを浮かべる。

「ずばり間宮哲郎君との関係がちょっと気になります！ 結構前にスーパーで会った時か

ら進展はあったんですか？」

ぐいぐい攻めていく。

それと同時にけい先輩がみっちゃんに同調し始める。

「みっちゃん。しつこくするのはやめなさいと言いたいけれども、私も少し気になっているのよね……という訳で、教えて頂戴^{ちやうだい}？ 哲郎君とどういう関係なのかをね？」

みっちゃんの姉であるけい先輩もにやにやとしながら山野さんへ詰め寄る。

一方山野さんと言うと、

「んー、内緒^{ないしよ}かな」

「あら、そう。なら、良いわ」

みっちゃん同様にグイグイ来てうざったらしいかと思いきや、けい先輩はすんなりと身を引いて問い詰める事などしない。

「みっちゃん。姉を見習え。お前も聞かれて返事が無ければ諦^{あきら}める。な？」

「んー、まあ哲君次第で考えてあげても良いよ？」

「お前なあ……」

みっちゃんとのやり取りを見てけい先輩がくすりと笑っている。

「けい先輩、少し笑ってますけどどうしたんですか？」

「いえ、まあ、みっちゃんに口止めされてるから言えないのよ。まあ、強いて言うのなら
 ばみっちゃんは確かにしつこいわ。でもね、あなたには特別にしつこいの。理由は……」

前にスーパ―で会った時と同様に、また何かを隠している感じで語るけい先輩。

「お姉ちゃん。言わないでよ？」

「分かってるわよ。あなたのささやかな復讐劇については言わないわ」

「お姉ちゃん！」

怒るみっちゃん。

復讐劇だと？ おい、みっちゃん。まさか、お前は本当に俺に恨みがあつて山野さんとの噂を流したり、しつこかったり、しているのか？

「本当なのか？ みっちゃん」

「んー、まあね。わざとではあるよ。でも、哲君が悪いんだからね」

「……で、理由は？」

「内緒かな。気が付くまで教えない。まあ、このままだと一生気が付かない気がするし、ヒントだけはあげる。私はクラスメイトです。これがヒントだよ」

……クラスメイトがヒントだと？

「分からね」

「まあ、良いよ。分からなくてもさ。私がしつこくうるさく哲君に振る舞うだけだし」

俺とみっちゃんの因縁について山野さんは気になったのか、答えを知っているであろう

けい先輩に教えてと頼んでいる。

「やまのん。耳を貸しなさい」

けい先輩は山野さんの耳元で何やら発言した。もちろん、俺には聞こえないようにだ。

「あー、うん。間宮君……。まあ、これは仕方ないと言えば、仕方ないかもだけど、それ

でも忘れちゃダメでしょ」

「忘れちゃダメ？」

「復讐される理由だよ」

「そんなに俺が悪いんですか？」

「うん、結構悪いね」

といった具合に色々と話しながらスーパ―で買い物をする俺達であった。

*

レジを終えて店内から出る。

「そう言えば、やまのんと哲郎君はここの辺の近所に住んで居るのよね？」
今しがた出たばかりのスーパーで買い物をするという事は、近くに住んで居ると言うのは明白な事実。

なにせ、この都会で電車に乗ってスーパーまで行き買い物をするなんてよほどの事が無い限りあり得ないのだから。

「まあ、ここのら辺ですね」

「うん、ここのら辺だよ？」

明らかにほぐらかしたような答えを二人して言った結果。

「その感じからして、二人はそれなりに近い場所ですらしているみたいね」

けい先輩に俺達はかなり近くに住んで居ると勘繰られてしまった。

お隣さんだとバレればみっちゃんはあるさいのがさらにうるさくなり、クラスメイトに俺と同じ高校に通う先輩とお隣同士で仲良くやっていると言い振り回すに違いない。

となれば、することは一つ。お隣同士である事を隠す事のみだ。

山野さんも俺と同じ考えらしく、明らかに目配せで話を合わせよ？ という感じだ。

「うん、かなり近いね。だから、帰り道が一緒で会う事が結構あって仲良くなったんだし」
「ですね」

お隣同士である事をバレないように取り繕う。

「やまのんの部屋の近くを捜し回れば哲郎君の部屋を見つけれられるという事ね」

「けい先輩は山野さんの部屋があるアパートを知っているんですか？」

「ええ。でも、そう言えば……やまのんのアパート付近に……」

言い淀むけい先輩。

「どうしたの？ お姉ちゃん？」

みっちゃんが言い淀んだけい先輩に聞く。

「やまのんのアパートの付近にはコンビニ以外は無いのよね……」と思い返してただけよ」
そんな言葉を言い切った後だ。

めっちゃけい先輩はこつちを見つめてくる。

無言でめっちゃ何かを訴えて来ている。

「……どうしたんですか？ なんか、凄くこつちを見ている気が……」

「そう言えば、みっちゃん。私はコンビニで通販の支払いをしないとダメなことを思い出したわ。先に帰ってて頂戴？」

ちようどあった目の前のコンビニ。スーパーで買い物をするようになる前までは良く俺が通っていたコンビニである。

なる程、俺じゃ無くてコンビニを見ていたのか。

「えー、スーパーで買ったたぐさんの荷物を一人で持つのはだるいんだけど」

「お土産にアイスを買ってあげると言っても？」

「それなら良し。んじゃ、先に帰ってるね。お姉ちゃん！」

元氣そうに走り去ったみっちゃん。

それを見送った後、けい先輩は俺達に向けて口を開いた。

「安心しなさい。みっちゃんには黙っておいてあげるわ」

「何をですか？」

「あなた達の事をよ。変に口裏を合わせてご近所に住んで居て、たまたま仲良くなったという風に誤魔化そうとしていたじゃない？」

「さ、さあ？ なんの事かな？」

惚ける山野さんの表情を見逃さないけい先輩。

「やまのん。あなたのアパートの近くには別のアパートと言えば、それなりにお高いような物件、もしくはファミリー層向けの広い物件しかない。この事を知らないあなたではないでしょう？ 前に私を家に招いた時にこう言っただけじゃない」

『このアパート以外だと割とお家賃が高いんだよね。もし、このアパートが空いてなけ

れば高校から少し離れた駅の近くで探さないとイケなかったんだよ』

山野さんっぽい口調と声で演じるけい先輩。

語られた内容は事実上の死刑宣告みたいなものである。

「……まあね。けい先輩が考えている通りで正解だよ」

隠すことは不可能。

未練がましくも、山野さんはけい先輩が考えていることを認める。

「まあ、安心しなさい。私はみっちゃんと違ってうるさくするつもりは無いわ。だから、あの子をこの場から追い出したんだもの。でもね、一つだけ忠告しておくわ」

ごくりと息を呑む俺。堅苦しい言い方とちよとした真面目な顔つきで忠告と言われれば仕方がない。

けい先輩は俺達に真面目な顔をして言い放つ。

「不埒な噂を立てられないように気を付けなさい。あなた達がお隣さんだとバレれば、仲良くしているあなた達の事を周囲は不埒な事をしている関係。そう思うに違いないわ」

「……でしょうね」

「だろうね」

「そして、やまのん。あなたは指定校推薦を狙っているのでしょうか？ 確実に一般受験で

受ければ合格するのが難しい大学の指定校推薦を狙っているのなら、変に噂を立てられて教師陣の耳に入らないように」

「そうだね。けい先輩の言う通り、そこら辺は気を付けておかないとか。指定校推薦を貰うために私は生徒会に入っただし、一般受験で狙っている指定校推薦の大学に通おうと思っただけ予備校に行かなきゃ絶対に無理。さすがに予備校に通うお金は無い。ま、一人暮らしをして無かったら行けたんだろうけど」

世知辛い話である。

勉強さえすれば良い大学に行けるといえるのは本当に一握りの天才のみ。

難関大学受験に向けた対策を行っている予備校に通わなければ、合格など夢のまた夢。

だからこそ、うちの高校では考えられない程のレベルの高い大学の指定校推薦を狙う。「脅しのような事を言っただけでも、安心なさい。やまのんがよっぽど変に噂されなければ平気よ。ただ少しだけ頭の隅に今言ったことを置いておきなさい。せっかく、成績上位で生徒会にも入って、指定校推薦を貰おうと努力しているのにもつたいじゃない」

山野さんが良い大学の指定校推薦を狙っていると初めて知った。

それにあって、生徒会に入っているのも知った。

そんな彼女の努力を無駄にしたいくない。確かに、けい先輩の言う通りよっぽど変に噂を

立てられなければ平気だろう。

だからこそ、指定校推薦を狙っている山野さんに対する教師陣の心証など周囲は気にせず噂するはずだ。

「山野さん。みっちゃんはどうだったか言いふらしそうなんです特に気をつけます」

みっちゃんとはただか不純異性交遊の噂程度で教師陣の心証が悪くなるわけが無いと思うようなタイプだろう。

山野さんに迷惑を掛けて嫌われたくないのではっきりと宣言した。

「考えすぎだって。別にへーき、へーき。ほんとに少しだけ気にしとけば十分だよ」

「そうよ。哲郎君。別に気にし過ぎることは無いわ。それこそ、やまのんとの色恋沙汰に關しては気にせずにガンガン行けば良いと思うわ」

向けられる、お前ら本当は出来ているんでしょ的な視線に山野さんがいち早く反応した。

「勝手に間宮君が私の事を好きだと決めつけないの、けい先輩。ごめんね。けい先輩がうざくて。ほら、間宮君をからかわない。というか、間宮君こそ私なんかと噂を立てられたら女の子たちからモテなくなる。あいつは彼女が居ると知れ渡れば、近づいて来る女の子が少なくなっちゃうもんね。よし、分かった。私もなるべく間宮君が変に噂されないよう

に気を付けるね！」

その様子を見てけい先輩はにこやかに言った。

「やたらと必死に哲郎君に迷惑を掛けまいと……ま、これ以上言うて怒られそうだから黙っておくわ。それじゃあ、私は本当にコンビニでアイスを買ってから帰るわね」

手をひらひらと振りながらコンビニへと入って行くけい先輩であった。

互いに迷惑が掛かるのを恐れ、外ではお隣さんというのを隠す事になった。

「二人して秘密を隠し通すってわくわくというか楽しい気がする。全然、楽しいような事じゃ無いのにな」

「ですね。という訳で、これからはあんまり噂をされない程度に仲良くお願いします」

「そうだね。私も間宮君に迷惑を掛けないように気を付けるね」

互いに迷惑を掛けないようにと立ち振る舞いに気を付けよう。

そんなことを言いあつた俺達は普通にアパートへと帰って来た……はずだった。

「どうしたんですか？」

困り顔でポケットをがさがさと漁る山野さんにどうしたのか聞く。

「間宮君。私、家の鍵を落としたみたい」

青ざめた顔で山野さんが告げた。

4章

「あ、はい。分かりました。それでは失礼します……」

結局のところ、山野さんの落とした鍵は見つからなかった。

仕方がないので管理会社に連絡をしているというのが今の状況である。

「で、どうでした？」

「スベアの鍵は管理会社が一応持つてるけど、今日はもう会社に入らないから渡すのは無理だつて言われた。どうしても、今日中に家に入りたければ、そこまで複雑な形の鍵じゃ無いから業者を呼んで開けてくれつつ」

なんだかんだで、そこまでの事にはならない様子。

しかしながら、山野さんはちよつと浮かない顔だ。

「取り敢えず良かったですね」

「うん、でもね……。お金が……。鍵を開けてくれる業者つてツケつて利くと思う？ 今月の仕送りがもう心もとなくてね」

鍵を開けるため業者を呼ぼうにも手元にお金が無いらしい。

俺がお金を貸そうにも残念なことに俺も仕送り前、お金はあまりない。

「……間宮君。一晩だけ泊めて貰えない？ 無理ならファミレスで明日まで時間を潰す。」

と言つても、多分年齢確認が厳しくて途中で追い出されるか補導される可能性が大だけど

「直球ですね」

「まあね。私だつて、正直に言うのと泊めて？ なんて頼むのはどうかと思つてるよ。お金は渡せないけどさ。何かでお返しする。だめ？」

普通に山野さんを部屋に招き入れた経験がある。

困っている隣人。一緒に節約するうえで好きになつてしまった相手のお願いだ。

「ま、仕方ありません。良いですよ。一晩くらい。ただ文句は言わないでくださいよ？」

「分かつてるつて」

こうして、軽いノリと流れで一晩、山野さんを部屋に泊める事になった。

ちよつと興奮してしまうのは言うまでもない。

もちろん、顔になんて出すつもりは毛頭もないがな。

「お邪魔しますと。唐揚げを作った時以来だね」

一度はお邪魔したとは言え、他人の部屋。恐る恐る山野さんは俺の部屋を見渡している。「じろじろ見られると恥ずかしいんですけど。さてと、ゆつくりとくつろいでどうぞ」

「本当にありがと」

そう言うのと唐揚げを作った時にも使っていたタッシオンを手に取り、自分のお尻の下に敷いて座り込む山野さん。

で、気が付けばスーパで買い物をしてから2時間が経っている。

もう夕食を摂るのには十分良い時間だ。

「さてと、夕食にしましょう。今日の夕食は……」

「あ、泊めて貰うんだから、私が作る。何食べよっか」

二人で相談した結果、夕食は鍋に。

山野さんが鍵を無くしてテンションが低いのでそれが吹き飛ばような美味しくて楽しい食事にしようという訳だ。

座ったのも束の間、泊めて貰うので恩を返すべくお鍋の準備をする山野さん。

俺は何もしなくて良いと言われたのだが、居ても立っても居られず普通に手伝う。

……なんだろう。女の子と一緒に料理とか得した気分である。

それから、悪戦苦闘しながら俺と山野さんはお鍋用の野菜を切った。

「間宮君。ぶきつちよだね」

「ですね」

俺が切った野菜は端が繋がっている。

料理に慣れて来たとは言え、包丁の使い方はまだまだである。

で、端が繋がっていた野菜を切り離してお鍋に詰め込む。

卓上用のガスコンロなんて物はないのでキッチンについているコンロで加熱。

ある程度したらお肉を入れて火を通す。

鍋が煮えたぎると、机に鍋敷き代わりとして用意した要らない雑誌の上に鍋を置いた。

「うん、出来たね。美味しそう」

「本当に美味しそうですね」

ぐつぐつと煮えたぎる鍋。

今日のお味はシンブルに出汁だけで、ボン酢やゴマダレで食べる方式だ。

本当に美味しそうで唾液が止まらない。

「食べましょうか。いただきます」

「いただきます」

二人して鍋をつつく。

出来合いのお弁当とか、お惣菜とかとは比べ物にならないぬくもりが広がる。

「はふっ、はふっ」

口の中が熱い。

でも、その熱さがたまらなく心地が良く、病みつきになる。

あつという間によそった食材たちを食してしまった。

「うん、本当に美味しいね。間宮君、器によそう？」

お鍋で代謝が良くなりおでこに汗が伝っている山野さんは気を利かせようと、俺の器が空になったので、よそってくれた。

それからお鍋の中の具が空になるまで、黙々と食べるのであった。

*

「ふー、食べた。食べた」

「山野さん。シメのうどんを作ってきます」

野菜の出汁と肉の旨味が溶け出たお鍋を持ち、再びキッチンへ。

買ってきたうどんを入れて温め、めんつゆで味を調節すればシメのうどんの完成。

「ダメ。こんな食事続けてたら絶対に太る」

山野さんは自身のお腹をさすりながら、シメのうどんの出来栄えに太ると愚痴を漏らす。

「意外と野菜が多いしカロリー自体は少ないので大丈夫ですって」

「それでも太っちゃうよ」

そんな適当なやり取りをしていたのも束の間。

綺麗に食べ終えて大満足な食事を終える俺と山野さんであった。

「ご馳走様でした」

「ごちそうさまです。美味しかったですね、山野さん」

「うんうん、大満足。はー、すぐ横になりたい気分だよ」

「別に気にせずに横になっても良いですよ。何人かの友達が来た時にくつろげるよう、クッションはたくさん用意してあるので何個でも使ってください」

部屋には座布団の代わりに用意したクッションが幾つかある。

それを使って、敷いて横たわるなり色々として良いと言った。

「さすがに人様のお部屋、しかも、一応、後輩だし。そんなだらしない姿は見せられないよ。と言うか本当にごめんね。夕食まで一緒に貰っちゃってさ」

「いえ、手伝って貰えたおかげでいつもより早く準備が終わったので全然気にしないどころか、人と一緒に食べるのは楽しいですから気にしませんよ」

「人と食べると何でも美味しく感じるよね。片付けは私に任せて。色々とお世話になるか

「私がしない」と

有言実行。山野さんは俺の代わりに食器を洗ってくれる。

*

そして、訪れた手持ち無沙汰で特にこれと言ってすべきことが無い時間。

今更だけど、女の子と一晚を過ごすって本当に信じられない程ドキドキだ。

食事という目的を失った俺達の間にちよつとした沈黙が訪れてしまい、ドキドキはさらに加速していく。

気まずさに耐えかねて、沈黙を先に破ったのは山野さん。

「私って本当に何をしてるんだろね。お隣さんの男の子の部屋に上がり込むなんてさ。今思うと、相当あれかも……。加えて、間宮君が噂されて迷惑を掛けないようにするって言った癖に、こんなバレたらヤバイ感じで噂をされそうなことを……」

「全然気にしませんって。それに、アパートでの出来事なんてバレないに決まってるじゃないですか。あ、そう言えば、お風呂を先にどうぞ」

俺も普段通りに振る舞おうとした。

しかし、どうもうまく行かずに急にお風呂を先にどうぞなんて口走ってしまう。

「え、あ、この季節だし、さすがに入らないと不味いかも。というか、もしかして匂つてないよね？」

クンクンとまでは行かないが、ちよつと鼻を動かし自分の匂いを確かめる山野さん。

あからさまではないが、明らかに羞恥心に包まれた装いがたまらない。

さりげなく着ている制服をちよつと動かすことで風を作り、自分の匂いが酷くないかを確認している姿も威力がある。

「全然ですよ。というか、俺の部屋こそ匂ってませんよね？」

「え、うん。臭くないよ。全然、本当に臭くないから」

匂いというナイーブな話題に触れあい気まずくなる。

山野さんはさすがにお風呂に入らないのは不味いと思っているのか、意を決したかのような感じで俺に告げた。

「間宮君。有り難く、お風呂を借りるね」

「どうぞ、どうぞ。今、タオルとか用意します」

すでに気まずいが、これ以上気まずくならないようにタオルとかを自然体で用意している。

あと、眠る際に制服のままというのも、スカートに変なシワが付いたら困るだろうし別なのを用意してあげるべきなのだろうか？

「俺のジャージで良ければ着ますか？」

「え、良いの？ 貸してくれるなら借りるけど……」

「じゃあ、どうぞ。シャンプーとかボディーソープとかもご自由に使ってください。後、ちよつとコンビニへ行つてきます。急に甘いものが食べたくなつたんで」

覗かれるとかそういう心配をかけたくないので俺は外へ出る事にした。

「……ごめんね、気を遣わせちゃつて」

「何のことですか？ それじゃ、山野さん。ちよつくら行つてきます」

「行つてらっしゃい、間宮君」

こうして、俺は山野さんを部屋に残してコンビニへと向かうのであった。

女の子のお風呂は長いと聞く。

ただコンビニで買い物をするだけでは時間が経たない。

汗ばむ季節でじつとりとした汗が流れて不快でも、少しばかり遠回りしよう。

だが意外と夜の道を歩くのは悪くなく、普段と違った装いを見せる街中というのは意外と感慨深く、気が付けばあつという間に時間が過ぎ去つていた。

ある程度時間を潰し、コンビニへと入る。

スーパーと違い、徒歩5分という位置にあるこのコンビニは非常に使い勝手が良い。

なんだかんだで、久しぶりという事もあり、多くの商品に目移りしてしまう。

コンビニの優れているところは毎週のように新商品が分かりやすい位置に置いてあることだなどか思いながら買い物をした。

二人きりで色々ときまづくなりそうだったので間を繋ぐためのお菓子やら飲み物だ。

コンビニに来る前に時間も潰して結構な時間が経っている。

さすがに山野さんがお風呂から上がっていないという事は無かろう。

という訳で、俺は部屋へと戻る。

「ただいま戻りました」

「あ、お帰り」

山野さんの髪の毛は肩に掛からない位だが、それでも男の俺からしてみれば長い方だ。乾かすのに時間が掛かっているのだろう、タオルでゴシゴシと拭いている。

貸したジャージなのだが着ている姿が非常に可愛い。

袖が長くて手が隠れてしまうあたり、俺の服を無理に着ている……という実感が込み上げてくるせいだ。

「ジャージの大きさは大丈夫でしたか？」

「うん、平気平気。それにしても、お風呂場も綺麗にして凄いな。私の部屋のお風呂場の方が絶対に手入れが行き届いてない」

「たまに独り立ちしてる姉が俺の様子を見に来るんです。なので綺麗にしとかないとお小遣いが減るという具合で綺麗になってるだけです」

「へー、そうなんだ。ねえ、間宮君。外に行って汗かいただろうし、お風呂に入ってきたらどうか？　こう、家主が汗びっしょりで私が綺麗さっぱりは気が引ける」

気が付けば帰って来た俺の服はじつとりと汗で湿っている。

他人の部屋で自分だけが綺麗になるのは無遠慮で、俺を氣遣つての事だ。

「じゃあ、そうさせて貰います」

「行つてらっしゃい」

俺はお風呂場へ。

普段は乾ききったお風呂場なのだが、掃除した後でもないというのにすでに濡れている。嫌でも、俺の前に誰かが使ったのだと実感してしまう。

「つく。ここで、山野さんが裸になってたと思うとヤバイ……」

あまりの興奮にちよつとくらつと来た。



そして、視界に入る長い髪の毛。

「俺の髪の毛からは想像できない長さの髪」

普段はお風呂場に落ちている髪の毛なんて汚いとか思うのに、もしかしたらこの髪は山野さんのだと思うと本当にドキドキが止まらない。

たぶん、こんなにもときめくのは山野さんだからだ。

色々な気持ちを静めながら、俺は綺麗さっぱりと汗を流す。

タオルを使い、体を拭き、寝間着として使っている速乾性のシャツに袖を通した。

そして、色々と抱いてしまった劣情を殺して、山野さんが待っている部屋へと戻るのだ。

「さっぱりしてきました」

「お帰り。急で悪いんだけど、携帯の充電器を良ければ貸して貰えないかな？」

「良いですよ」

普段使っている充電器を手渡す。おそらく、山野さんの携帯も充電できるはずだ。

「ありがと。遠慮なく使わせて貰うね。はー、今日は本当に助けて貰えばなしたよ」

自分を情けなく思っただけのため息。

だらりと体が脱力していくその姿には気疲れが見えている。

「気にしないでください。という訳で山野さん」

先手必勝。二人きりの夜を気まずくならないための策を実行に移す。

「せっかくなので、映画でも見ましょうか。そのためにコンビニでお菓子やら飲み物を買ってきたんで」

先ほどコンビニで買ってきたお菓子の入った袋を見せつけた。

すると、山野さんは気疲れしている顔から一転。乗り気な顔へ。

「今日は寝かせないよ？ 的な感じかな？」

「はい。今日は朝まで映画を見ましょう」

俺は自分が使っている、入学祝いで買ったノートパソコンを用意。

月額サービスに入っているの、ある程度の映画は見放題だ。

その中から、名作映画で無難なものを再生させれば良い。

「じゃあ、見ましょうか。横、失礼します」

パソコンを机に置き、見るためには横に座らざるをえないので山野さんが座っている横に腰掛けた。

ちよつと距離を遠めに腰掛ける。

「そんなに気にしなくて良いよ」

山野さんが見やすいようにパソコンを動かして、俺の座っている近くへ、くいくいつと

お尻とクッションを滑らせて近づいて来た。

距離にして30 cmくらいだろうか。

それだというのに、なんかもういい匂いにする気がしてうずいてしまう。

「お菓子のお金は後で払うから」

「このくらいは大丈夫ですよ。最近、節約してるので」

「ううん、気まぐすくならないようにわざわざ買ってきてくれたんだし、私がきちんと払う」
お見通しだった。

気まぐすさを誤魔化するために俺が映画を見ようと言って、お菓子を用意したのなんて普通に見透かされていた。

まあ、誰だって気が付くか。

「分かりました。お金は貰います。でも、きっちりと半分だけで」

「本当に間宮君は今日買ってきたお菓子代の全額は受け取らないだろうし、そうさせて貰うね。さてと、準備も終わったし見よっか」

「はい。最初は何から見ます?」

「うーん。笑えるのが良いかな。鍵を無くしてショックだし」

そう言われたので、見放題のサービスのの中から笑える作品を選ぶことに。

二人して、これも捨てがたい、でも、こっちも良いよねとか言いながら、作品を選んだ。映画を再生する前だ。山野さんはこういう。

「せっかくだし、気分を盛り上げるためにも電気を消さない?」

「それも良いかも知れませんがね。電気代の節約にもなりますし……。まあ、ほんの少しの節約な上に目が悪くなるかというリスクはありますけどね」

「それでも、私は電気を消したいんだよ。鍵を無くしてショックな気分を明かりが消えた部屋でプチ映画館気分を味わって元気になるためにもね……」

という訳で、明かりを消して、お菓子をお供に映画を見始めた俺達。

普段一人で映画なんて見ている時は笑いもしないというのに、俺もそれに釣られて笑みがこぼれる。

映画が流れている際に言葉なんて無いのに、ただ一緒に誰かと見ているだけでいつもよりもわくわくして面白い。

「面白いね。間宮君。それに、これは中々だよ」

「何がですか?」

「お菓子。だって、間宮君がいるおかげでいつもと同じ値段しか払ってないのに、違うお菓子も味わえるから」

机にはポッキー、じゃがりこ、等々。

確かに一人だと、同じ値段ではこんなに種類を揃えることは出来ない。

「一人よりも二人ですね」

「で、最後の一本のポッキーはどうする？」

最後の一本のポッキーは遠慮の所為か二人とも手出しをしていないせいですと残っている。

「山野さんが食べて良いですよ。たかだか、最後の一本のポッキーを巡って争うほど子供じゃないので」

「私も子供じゃないから、別に間宮君が食べちゃっても良いよ」

「いえいえ、山野さんがどうぞ」

「ううん。間宮君が食べちゃいなよ」

それから少しの間、どっちが食べるのかを言い合う俺と山野さん。

で、途中で面倒くさくなった山野さんがポッキーを手に取り、俺の口元へ押し当てて来たので仕方がなく俺は口に咥える。

「うん、これで良し。さてと映画もいとこだし黙らせて貰うね」

最後の一本のポッキーを巡るやり取りを繰り返しながらも、映画を楽しむのであった。

*

二本目が見終わり三本目の映画が流れる部屋。

すっかりと夜も更けて眠気が体を襲いつつあり、映画に集中など出来ない。

「んんっ……」

机に突っ伏して、ちよっとした寝息を立てる山野さん。

どうやら眠気には勝てなかったらしい。

無防備に眠る姿、艶やかな髪と整った顔が嫌でも目に入る。

「ほんと可愛いな……」

見ていて可愛いとは思えない。

柔らかそうな頬つべたをつんつんとしたい、髪の毛に触れてみたい。

寝ているからバレないだろうと軽い気持ちで手を伸ばしかけてしまう。

「いいや、ダメだ」

が、手を止める。

これからの事を思うのなら、手を伸ばしてはいけない。

山野さんに惹かれてゐるのなら、今するべきことは手を伸ばす事じゃ無い。そつと俺は立ち上がり、いつも使っているタオルケットを手取る。手にしたタオルケットを机に突つ伏して寝て居る山野さんに被せた。

「俺も寝るか」

山野さんが寝てしまったので俺も取り敢えず眠ることにした。

本当は山野さんに使わせてあげるつもりであつた自分のベッドの上で。

眠れないのでは？　と思つていた。

しかし、溜まりに溜まつた眠気はもやもやとした感情を押しつけ俺を眠りへと誘つた。

朝、と言うのにはもう遅く。

午前中と言うべき時間に達しない。

夜更かしの疲れが残っているのか、瞼は重く中々に開かない。

「……すう」

浅く息をする音が近い。その正体を確認すべく、目を開けていく。

「つて、山野さん!？」

起き抜けなのに大きな声が出た。

そう、ベッドの上に山野さんが居て、俺の目の前で吐息を立て寝ているのだ。

「ん？　あれ？　こつて、私の部屋じゃ……ない？」

目をこすりながら起き上がる。

すぐに自分がやらかしたことに気が付いて顔がみると赤くなつていく。

「あは、あははは……」

乾いた笑い声。

恥ずかしさがピークに達したのだろう。

「死にたい。寝ぼけてなにやつてんだろ、私」

「俺は何もして無いですからね？」

「え、あ、うん。そうだね。《間宮君は何もして無い》のは分かつてるから。というか、ごめんね。勝手にベッドに入つて。うん、本当にごめんね？　ほら、明かりがついて無くて寝ぼけてただけだから。ね？」

「いや、まあ」

いい気分でしたとか言つて気まづくなつたら困る。

お茶を濁すように言い淀ませてこの場を乗り切ろうとした時だ。

山野さんの姿があれなことに気が付いてしまう。

そう、俺が貸したジャージは大き目で腰回りは山野さんにはデカイ。

寝ている際に動き回ったのだろうか、山野さんが穿いていた筈のジャージは脱げていた。代わりに見えているのは、ピンクでちよつとしたレースが付いているパンツ。

そして、綺麗に伸びる生足だ。

つい、釘付けになってしまった俺の視線。

すると、その視線がどこに向いているのかを山野さんは確認すべく目を動かす。

「あ、え、え、つと。ぬ、脱げてる!？」

顔は更に真っ赤に。

急いで穿いていたはずのジャージを探して、身に着けていく。

「うん。恥ずかしくて、死にそう……」

リングのように赤い顔で恥ずかしがる。

その姿はもうたまらない。

「えっと、その、大丈夫ですか？ あと、見てすみません」

取り敢えず、大丈夫か聞いて、一応見たことも謝しておく。

「う、うん。大丈夫……。あと、間宮君は悪くないから、うん、悪いのは私だから気にしないだね？ ね？」

しどろもどろで落ち着かない山野さんは俺の顔をちらちらと見ては目を背けて、髪の毛をいじったり、手をくねらせたりと物凄く恥ずかしそうであった。

やばいなあ、山野さんの事がもっと好きになって来たんだが？

パンツを見てしまい、俺と山野さんは気まずくはなったものの、それも和らいできた。「んじゃ、私はそろそろ管理会社に行つてスベアの鍵を受け取つて来るね」

ジャージから制服へ着替えた山野さんはスベアの鍵を取りに行くとの事だ。

「行つてらっしゃい」

「本当に色々にご迷惑をお掛けしました」

礼儀正しく頭を下げた山野さん。

親しき中にも礼儀ありで、非常に好感が持てる態度である。

「そんなことは無いですつて。鍋とか映画とかいろいろ出来て楽しかったですよ」

……それに、生パンツと生足を拝めたし。

口が裂けても言えないが、実物のパンツと生足なんて姉以外のを見たのは初めて。加えて好きになった相手のと来たらもう堪らないとしか言いようがない。

「じゃあ、行ってくるね」

せっかくなので、玄関まで見送りに行く。

一晚過ごして、思いはより一層強まった。

山野さんと一緒にこれからも過ごしたいからこそ言うべきだ。

「昨日の鍋を作るときだったり、お菓子を食べた時だったり、二人で色々とするのって時間の節約になりますよね」

「ご飯の時はなんだかんだで間宮君も手伝ってくれたからね。私一人でやるよりも、だいぶ早くに完成したよ。うん、一人でするよりも、二人の方が色々節約になると私も思う」
これではただの感想だ。

一緒に過ごしたいのなら、下心がバレるとかそれ相應のリスクを負わなくてはいけない。そんな俺はゴクリと生唾を飲み込んでこう言った。

「けい先輩には程々にしないと周りから噂されて損するかもと言われました。でも、こういう風にこれからも二人で協力しませんか？」

例えば周りから色恋沙汰で山野さんが噂され、教師陣の見る目が変わるかもしれない。

山野さんの事を考えれば、俺は適切な距離を置くべきだ。

そうは分かっているけど、俺はどうしても山野さんに近づきたい。

なにせ好きになってしまったのだから。

「そうだね。間宮君は良い子だし。協力しない手はないよね」

俺が思っていた以上にナチュラルな反応。

山野さんは俺に向かって手を伸ばしてきた。

いわゆる、握手を求められているのだらう。伸ばされた手を握り返す。

「せっかくお隣さんで仲良くなれたんですから、この状況を大いに活用してやりましょう。二人でしか出来ないような節約術で楽しましょう」

「うん、頑張ろうね。改めて、お隣さんと始める節約生活の始まりだね。片方が音を上げても片方が助ける助け合いの精神で頑張ろ？」

「つぶ」

「っあはは」

やけに積極的な雰囲気。二人してこんなことにどうして本気になっているんだかと軽く笑いあう。

「それじゃあ、スベアの鍵を取りに行ってくるから」

握手していた手をほどき、山野さんは目の前から去って行くのであった。

山野さんが去ってから、2時間後。

今日は休日で学校は休み。

部活もして無いし、バイトもして無いし、遊ぶ約束もして無いし、無い無い尽くしな俺は家でゆったりと過ごしていた。

そんな暇な俺はピンポンとインターホンが鳴ったので応対をしに行く。

「はい、間宮です」

「山野です。鍵は何とかなったよ」という報告に来たよ。ほら、迷惑かけたし、一応、事の顛末は話とかな」と

「あ、はい。そうなんですか」

それから、山野さんはわざわざ俺に事細かく事の顛末を説明し始めた。

「で、なんだよ。防犯の都合で大家からは鍵を交換せよと言われまして……」

「賃貸ですからね。この部屋の鍵は一度無くなって、誰かの手に渡っているかもしれないもん……なんて許されませんし」

「そうそう。だから、防犯上の都合で鍵の交換は必須で交換して貰う事になってる」

朝、山野さんがやけに協力的で積極的に二人で節約を頑張ろうと約束してくれたのはこういう理由もあったんだな。

「つまり、お金が掛かったと」

「そういう事です。だから、私はより一層と節約を心にしなくてはいけなくなりました。

なので、サボってたら容赦なく尻を叩いてください。じゃないと、今度の休みに金欠で友達のご飯で気を遣わせちゃうし」

思いもよらない出費のせいで、少しばかりの金欠に陥ったのだ。

だからこそ、節約をさぼらないように二人で節約を頑張ろうという訳だ。

「だからこそ、朝に握手までして互いに頑張ろうと約束したんですね」

「まあ、昨日電話かけた時にそういう話は受けたから。私って意志が弱いから、挫けないように間宮君に見張って貰おうってのもあるね」

「分かりました、付き合いますよ。これから、夏も本番に入り、電気代が怖そうなので。

俺も頑張ろうと思ってました。ちなみに、山野さんは去年の夏場の電気代はどうでした？」

去年からこのアパートに住む山野さんに参考までにだが、夏場の電気代を聞いた。

すると、とんでもない額が口から飛び出て来て俺は目を真ん丸にしてしまう。

「な、なんで。そんなに高いんですか？ ネットだと一人暮らしの夏場の電気代の相場はそんな高くないのに」

「それはね……。学校もない、仕事もないから。ああいうネットでの相場には長く家に居る人たちのデータはあんまり反映されてないからだよ。私も去年は驚いた」

そう、学校もない、仕事もしてなければ自ずと家に居る時間は増える。

だが、それでも山野さんが口にした金額は盛りすぎでは？　と愚えて仕方がない。

「それでも、盛りすぎじゃ……」

「エアコンの電気代は気温によって結構変わるらしいよ。昼間は高くて、夜は安くなるんだって。一人暮らしで仕事に行つてると、昼間はあまり使わないから電気代が高くなりづらい。でも、私達は昼間にもいる。夜にもいる。という訳で、思った以上の金額になるという訳だよ。あと、このアパートに備え付けのエアコンの性能が低いってのもある」

非常に分かりやすい説明を受けて、俺は打ちひしがれた。

苦しいのが嫌なので、冷房を利かせた部屋で過ごしそうと思っていたのに、我慢しようと思え愚えて来てしまう。

「私は鍵の交換もあり、今年は夏場の電気代を節約することにしました。まあ、具合が悪くならない程度だけ」

「俺もそうしたく思います」

「で、話はこれからなんだよ。間宮君」

神妙な面持ちで俺の目を見てくる。

何を話されるのかと唾をこくりと飲み込み待ち受ける。

「な、なんですか？」

「単純計算で、電気代が半分になる画期的な方法があると言ったら？」

興味を引かれた。

電気代が半分？　節約の情報が載っていたサイトではせいぜい3円とかみっちり金額しか節約できていないのに？

一体、そんな節約方法は本当に存在するのか？

「教えてください」

「一人よりも二人。簡単に言うと、一部屋を二人で使えば良いんだよ」

なるほど、同じ部屋に二人で居れば、冷房を動かすのは一台で良いし、照明も一つ付けばいい。

シンプルで単純な節約方法だ。

「それってつまり、俺か山野さん、どちらかの部屋で二人一緒に過ごすって事ですよ？」

「そうだよ。正直に言うと、私もこれを言うかすごく悩んだ。でもね、一晩泊めてくれた間宮君があまりにも紳士的だったからこそ、言えると思うたんだよ。それに、一番電気代が掛かる昼間だけ、夜はちゃんと自分の部屋に戻るつもりだから安心して？」

断る理由が無かった。

だつて、好きな女の子と一緒に過ごせるんだぞ？
普通に嬉しくて仕方がない。

「分かりました。そうしましょう」

「ふう……。一安心、一安心。結構、とんでもない申し出でどうなるかと思ってたからね」
「まあ、確かにそうですけど。鍋も一緒に囲んで、一緒に遅くまで映画を見た。もはや、山野さんとは普通に友達を通り越して親友レベルに達してると言えます」

「うんうん、親友なら別に一緒に部屋に居た所で平気、平気。でも、プライベートが欲しくなったら遠慮なく言つてね。あくまで、出来る限りの節約。節約をして苦しいのは私のモットーじゃ無いし」

節約して、苦しくなるくらいならしない方がマシという考えは俺もそうである。
実際問題、絶対に電気代は半分にはならないのは知っている。

けれども、そこまで苦しくないのならしないよりはかした方が良さ。

「はい。じゃあ、色々決めましょうか。暑いでしょうし、部屋の中にどうぞ」
部屋に招き入れようとするも、

「ちょっと待つてね。ほら、昨日から同じ服だし着替えてくるから」
着替えるために自身の部屋へと戻つて行く山野さん。

少し変態じみている気もするが、昨日から同じ服というのに興奮するのは俺だけでは無いはずだ。

といった感じに下心満々で、エロい考えを抱くがそれを振り払う。

せっかく纏んだ一緒に過ごすという時間を台無しにしないように、自制を頑張らないといけないしな。

山野さん side

「……あはは。凄い事言っちゃった」

玄関で靴を脱ぐのを忘れて、その場で小さくうずくまってもどかしさに耐える。

「さすがに電気代のためとは言え、一緒に過ごそうだななんて強引過ぎでしょ……」

電気代のために一緒に過ごそうというのも理由の一つ。

だが、本当の理由は一緒に居たいからだなんて口が裂けても言えない。

「問宮君の事が好き過ぎてヤバイ」

朝、寝ぼけてベッドの上に乗ったと言ったのだが、あれは嘘である。

何を隠そう、自分で乗ったのだから。

机で突っ伏して寝て居たがふと目が覚めた。

ベッドで間宮君が寝ていたのを良い事に、つんつんと頬を突いたり、腕を触ってみたり、眺めてみたり色々とした。

それから、ちよつと横で添い寝して夢見心地を味わっていたら、本当に夢の世界に入ってしまったというのが今朝、一緒のベッドで寝ていた理由。

「でもさ、でもさ、昨日に何も起きなかったという事はそういう事なんだよね」

ただの友達。

仲良くし始めて3週間くらい経つ。一緒に料理したり、料理のお裾分けをしたり、食材の買い出しだったりをしている。

派手さや劇的な何かがあったわけでは無いが、これだけ色々な事があった。

「好きになっていたら、好きになっていても、おかしくないはずなのに……」

そう、相手の事を好きになっていてもおかしくない状況。

日常で垣間見る相手の良いところを知って、それに惹かれて好きになる。

間宮君がもし仮に私の事を好きになっていたとしたら、確実に昨晚、何かが起きていないければおかしい。



何も起きていないこの状況を一言で表すのなら、やはり間宮君は私の事を、

「ただの女友達」

この程度にしか思っていないに違い^{ちが}ないと思われる。

だからこそ、私は電気代のためにとか理由を付けて一緒に過ごそうだなんて事を口走ったのだ。

「友達としか思われていないのなら異性として思われるように頑張^{がんば}らないとね」

シャワーを浴びて今着ていた服を着替える。

そして、私はお隣^{となり}さんへと向かうのだ。

続きは、11月20日発売のファンタジア文庫で！

©Kuroi, U35 2019